

大友府内16

中世大友府内町跡第84次調査報告

住宅併用病院建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

大分市教育委員会

大友府内 16

中世大友府内町跡第 84 次調査報告

住宅併用病院建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

大分市教育委員会

序 文

本書は、大分市教育委員会が住宅併用病院建設に伴い実施した「中世大友府内町跡第84次調査」の成果を収録した発掘調査報告書です。

近年、「大友氏遺跡」を中心として戦国時代の都市「豊後府内」の繁栄していたようすが発掘調査により明らかになりつつあります。

今回の調査地は、『府内古図』によると中世大友府内町跡の北東に位置する「中之町」の一角にあたり、16世紀前半から後半に位置づけられる敷地を区画する溝状遺構や鍛冶関連遺物を廃棄した土坑等が検出され、町屋の性格や構造に関する新たな知見を得ることができました。

本書が、文化財愛護への理解を深める一助となり、学術研究や歴史学習等に幅広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまでご理解とご協力を賜りましたわたなべ動物病院並びに関係各位に対しまして、心より感謝申し上げます。

平成22年3月31日

大分市教育委員会

教育長 足立 一馬

例　　言

1. 本書は、住宅併用病院建設に伴う事前調査として、わたなべ動物病院の委託を受けて実施した大分市錦町3丁目に所在する、「中世大友府内町跡第84次調査」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、大分市教育委員会が調査主体となり平成20年10月30日から平成20年11月21日にかけて行った。
3. 調査にあたっては、わたなべ動物病院の全面的な協力を得て行った。
4. 調査組織は以下の通りである。

平成20年度（中世大友府内町跡第84次発掘調査）・平成21年度（遺物整理及び報告書作成）

調査主体　大分市教育委員会　教育長　足立　一馬

事務局　大分市教育委員会

教育部次長兼文化財課長　　玉永　光洋

文化財課　参　事　　岩田　祐治

　　課長補佐　　塔鼻　光司（平成21年4月～）

　　主　幹　　後藤　典幸（平成21年4月～）

管理係　課長補佐兼管理係長　　福田　誠一

　　主　查　　幸　俊昭（～平成21年6月）　筒井　和信（平成20年12月～）

　　桑原　治　渡辺　政雄（平成21年7月～）　神崎小由美（平成21年7月～）

　　栗田　博之（平成21年4月～）

　　指導主事　　姫野　公徳（平成21年4月～歴史資料館）　植木　和美

　　主　任　　宮崎　勲　麻生　重徳　山上洋二郎

　　竹中　智美　加藤　キヌ（～平成21年6月）

文化財係　文化財係長　　坪根　伸也（平成21年4月～）

　　専門員　　池邊千太郎　高畠　豊　河野　史郎　塙地　潤一

　　主　任　　中西　武尚（平成21年4月～歴史資料館）　永松　正大（調査担当）

　　佐藤　道文（平成21年4月～）

　　主　事　　五十川雄也　長　直信　石川ゆかり（平成21年4月～）

　　嘱　託　　上原　翔平（調査担当）　小島　愛　姫野　久恵

　　廣瀬　育子　山下　朋紀　三嶋　桂司（調査担当・報告書担当）

5. 調査は永松正大・上原翔平・三嶋桂司が行い、主に南区を永松正大が、北区を三嶋桂司が行った。
6. 調査に関わる掘削・埋戻業務は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
7. 現場遺構図面は各調査担当の他、山下朋紀が作成を行った。
8. 遺構図面のトレースは上原翔平・小島愛・姫野久恵・三嶋桂司が行い、小島愛が構成を行った。
9. 遺物については、整理作業（洗浄・接合・注記等）を上原翔平・三嶋桂司が行い、実測・トレース作業の半数は有限会社九州文化財リサーチに委託し、残りを三嶋桂司が実測し姫野久恵がトレースし、小島愛が構成を行った。銭貨の観察表は山下朋紀が行った。
10. 遺物の写真撮影は有限会社九州文化財リサーチに委託した。
11. 座標については、世界測地系（日本測地系2000）の平面直角座標2系（北緯33° 13' 41" 東経131° 37' 25") を基準として調査を行った。
12. 執筆は廣瀬育子（第1章）・三嶋桂司（第2章・第4章）がそれぞれ行った。
13. 編集は小島愛の補助を受け三嶋桂司が行った。
14. 出土遺物及び記録資料は大分市教育委員会文化財課に収蔵・保管している。

目 次

第1章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の立地環境	
地理的環境	1
歴史的環境	1
第2章 調査の成果	
第1節 発掘調査概要	4
第2節 第1遺構検出面	7
第3節 第2遺構検出面	11
第4節 第3遺構検出面	17
第3章 まとめ	21
遺物観察表	23
写真図版	25

凡 例

1. 遺構の規模及び標高についてはmを、遺物の法量についてはcmをそれぞれ使用している。
2. 遺構実測の基準及び方位は国土座標（第II座標系）を使用している。
3. 遺構略号はSB（掘立柱）・SD（溝状遺構）・SK（土坑）・SP（ピット）・SX（その他の遺構）を使用している。
4. 本書で用いた出土陶磁器の分類及び編年観は主として以下の文献による。

なお、中国産の染付を「青花」と呼称する。

青 花： 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2

青 磁： 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2

備前焼： 乗岡 実 2000 「中世備前焼（壺）の編年案」『第2回中世備前焼研究会資料』

京都系土師器皿： 塩地潤一 1998 「大友領国内における京都系土師器の分布とその背景」

『博多研究会誌第6号』

5. 参考文献は以下の通りである。

平野晴夫 1995 「常滑・渥美」『概説 中世の土器 陶磁器』 中世土器研究会編 真陽社

續伸一郎 1995 「中世後期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器 陶磁器』 中世土器研究会編 真陽社

塩地潤一 2001 「九州出土の京都系土師器皿」『中近世土器の基礎研究14』

木村幾太郎 2001 「豊後府内城下町移転と旧府内町」『大分・大友土器研究会論集』 大分・大友土器研究会

坪根伸也・塩地潤一 2001 「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』 大分・大友土器研究会

大分県教育委員会 2006 『豊後府内3』 大分駅付近立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（3）

坂本嘉弘 2008 「中世都市 豊後府内の変遷」『戦国大名大友氏と豊後府内』 鹿毛敏夫編 高志書院

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

住宅併用病院建設のため、平成20年10月9日に文化財課に関係書類の提出があった。この開発では、中世大友府内町跡の埋蔵文化財包蔵地に該当することから、同年10月30日に建物が建てられる範囲の遺構の確認調査をおこなった。その結果、全域にわたって複数の遺構検出面の確認ができた。その段階で開発をおこなう建物は、RC造りの2階建てであり、しかも杭が基礎部分に打ち込まれることから遺跡の保存が困難であることがわかった。

工法変更を含め協議をおこなったものの、計画変更は困難であることから建物の基礎によって破壊される部分を中心に発掘調査を実施し、それ以外については遺跡の保存が可能であることから盛土保存に務めることになった。

確認調査の結果と協議による遺跡の保存措置が決まつたことから、平成20年11月5日に93条の提出を県におこない、これと並行して、埋蔵文化財発掘調査業務等協定書を同年11月7日に結び、発掘調査の実施方法、出土品の保存措置、発掘調査の費用負担等について取り決めをおこなった。

93条の回答については、平成20年11月11日に県教育委員会より発掘調査の実施についての通知が出された。申請者に通知したのは同年11月13日である。

発掘は平成20年11月21日まで実施、翌年の平成21年度には、報告書の作成作業を実施した。

第2節 立地と環境

1. 地理的環境

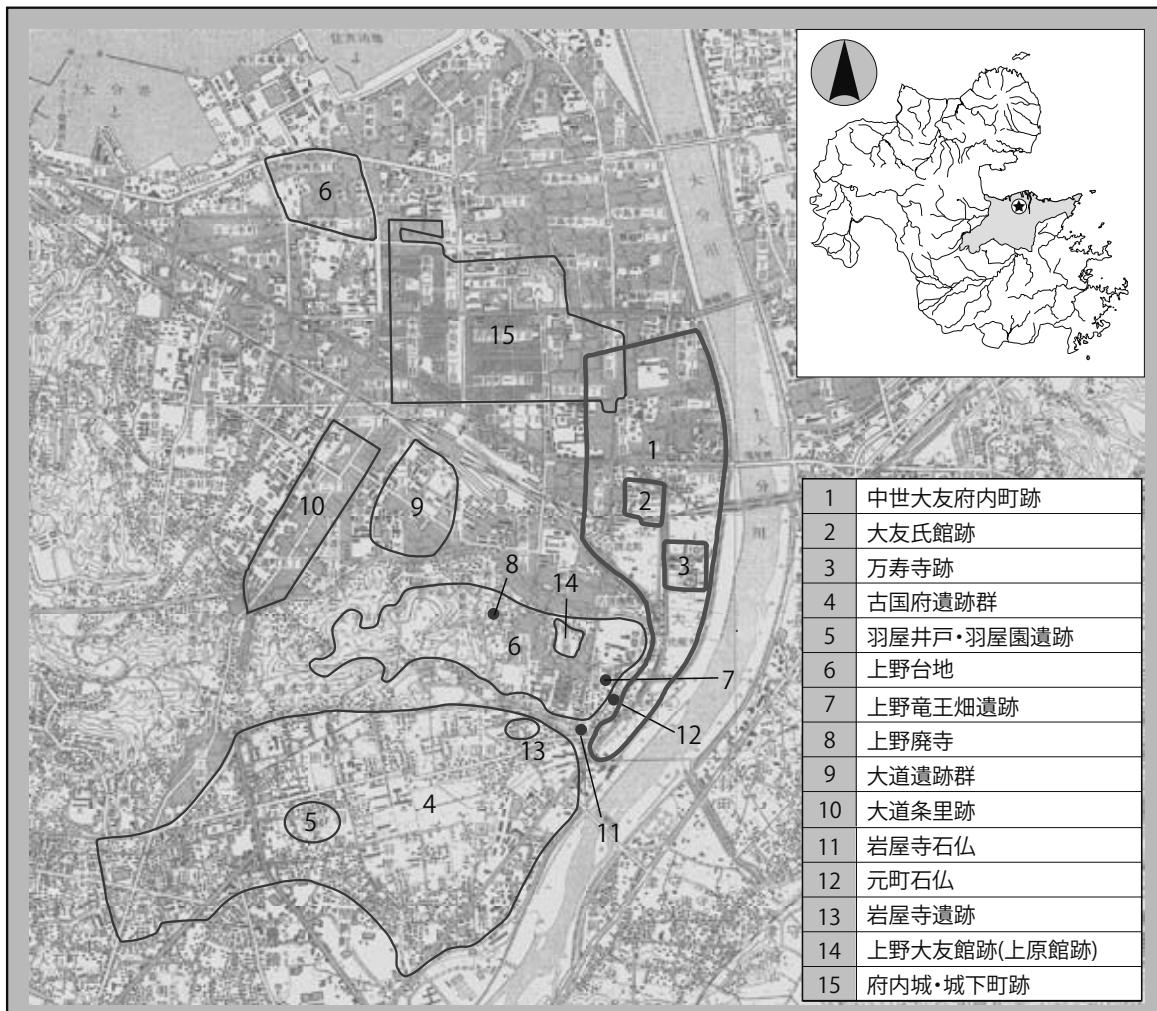
大分平野は、丘陵や河川によって分断された小規模な平野が各所に展開する地形をなしている。大分川は、大分平野を流れる河川の一つで、平野中央部から西部を東流後北流し、河口部にはデルタ平野を形成して別府湾に注いでいる。近代以前、河口部は多くの流路に分流していたと考えられており、周辺には河川に伴う自然堤防が形成されている。これらの古河川は現代の平野下に埋没しており、中世段階の大分平野は現代に比べてより狭小な範囲と想定されている。

調査対象となる中世大友府内町跡は、大分川左岸に形成されたこのような自然堤防上に位置しており、現在の標高は4～6mである。大分平野の中央部にあたり、北に別府湾、東に大分川、南には標高30～40mの上野丘台地が広がり、西は高崎山（標高628m）へと続く標高100m前後の起伏の激しい丘陵に囲まれている。発掘調査の結果、この自然堤防の検出面は粘質土層で、下位には厚い砂層堆積が確認された。砂層下位からは縄文時代後期～古墳時代前期の土器が、上位からは8～9世紀頃の遺物が出土している。したがって、おそらくこの間に2～3mの堆積があり、この自然堤防が形成されたと考えられている。

2. 歴史的環境

〔古代〕

豊後国府の推定地としては、古国府・羽屋地区および上野台地一帯が挙げられる。近年、羽屋井戸・羽屋園遺跡の発掘調査において、大規模な掘立柱建物跡群や倉庫跡群が検出されているが、これらは7世紀後半～8世紀初頭に比定されることから、郡成立以前の評に関連する施設と考えられる。8世紀以降については、古国府地区周辺では主だった遺跡は発見されていない。一方の上野台地の竜王畑遺跡からは、7世紀後半～10世紀代にかけての遺構群が見つかっている。なかでも9世紀代に比定される築地塀跡や掘立柱建物跡群は注目されており、国司館など国府関連施設の可能性が考えられる。上野台地周辺では他に上野廃寺跡、岩屋寺跡などの古代寺院跡がある。上野廃寺跡では、8～9世紀代に比定される版築基壇跡と基壇上に築かれた礎石建物跡が検出されてお



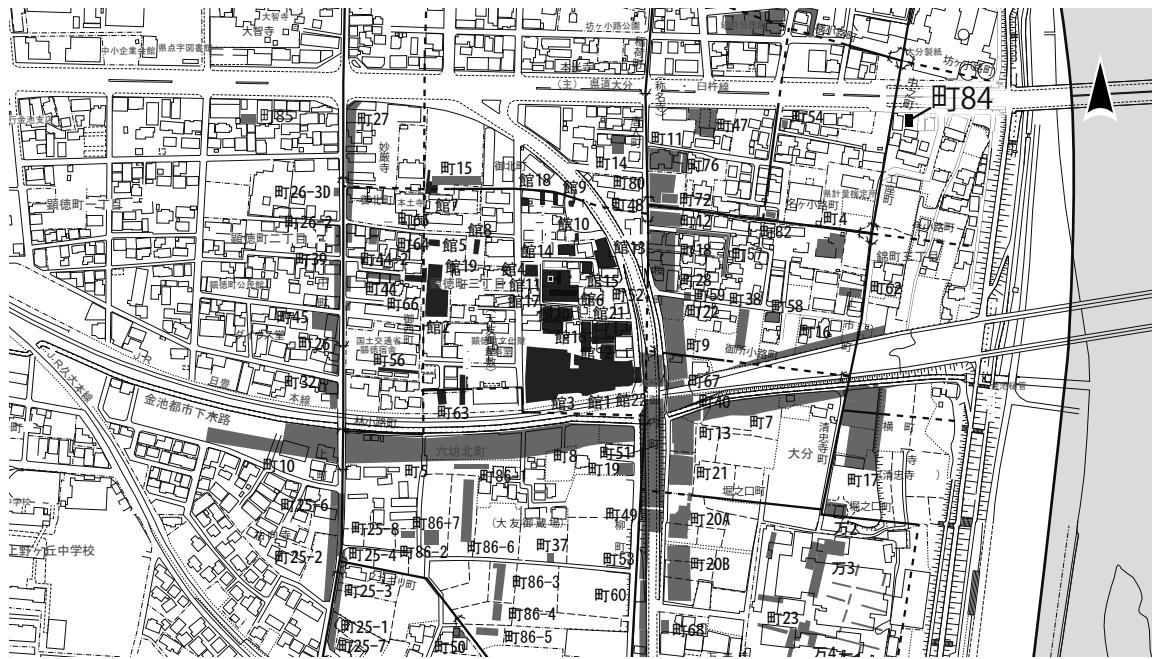
第1図 周辺遺跡分布図（古代～近世）

り、百濟系軒丸瓦や豊後國分寺創建段階の瓦が出土している。また、中世大友府内町跡においては、第6次調査で8世紀後半の大型の井戸跡が、第7次調査で8世紀代の大型掘立柱建物跡が検出されている。大道遺跡群からも、23次調査で8世紀末～9世紀前半の掘立柱建物跡14棟が検出されており、官衙関連施設と考えられる。これらのことから、当初古国府地区にあった官衙主要部が、時代が下ると上野台地及びその周辺へと移行したことが想定される。

11世紀後半～12世紀後半には、上野台地周辺の崖面に岩屋寺石仏、元町石仏といった磨崖仏が造営されるが、これらの造営主体に想定される国衙的な遺跡は、現在確認されていない。

[中世]

12世紀末、大友氏が豊後國の守護職に任じられるが、実際に豊後へ下向するのは13世紀中頃の3代頼泰になってからとされている。入国当初の守護所について、中世大友府内町跡の発掘調査では、当該期の遺構の明確な発見はされていない。しかし、上野台地南側の古国府地区東部の自然堤防上に位置する石明遺跡からは、13世紀代の池状遺構・区画溝などを有する大規模な遺構群が検出されており、初期守護所の可能性が考えられる。15世紀代以降の守護所所在地としては、上野台地北縁の「上原館」と中世大友府内町跡の「大友館」が挙げられる。「上原館」は、「御屋敷」という字名や館を囲む土塁、堀跡が残っており、古くから存在が周知されていた。発掘調査では、中世の土塁のほかに、古代の溝状遺構などが確認されている。「大友館」は、16世紀後半の府内を描いたとされる「府内古図」に描かれる大友氏の居館である。平成10年度に行われた発掘調査（館1次）において、巨石を配し池を伴う大規模な庭園跡などが発見されたことから、所在地として特定された。その後の調査



第2図 大友氏館跡・中世大友府内町跡調査位置図 1/7000 (『大分市史』中巻附図IIを改変)

により、数度の画期を経つつ「上原館」とは異なる機能をもつ施設として15世紀前半～16世紀後半まで継続的に使用されたことが明らかとなった。

一方府内の町では、徳治元年（1306）に大分川東岸の自然堤防上に万寿寺が建立されたことを契機として、本格的な都市建設が始まったとされている。町は「府中」と称され、大友氏の経済・政治の中心として発展した。戦国期になると「府内」と名を変え、大友氏21代義鎮（宗麟）のころには南蛮貿易により隆盛を極めるが、天正14年（1586）の島津氏侵攻により焼亡する。この後、町は復興を遂げるものの、守護所である「大友館」が再建されることはなく、文禄2年（1593）、22代吉統（義統）が朝鮮出兵における失態を理由として除国されるに至り、大友氏によってつくられた府内の町は終わりを迎えた。

〔近世〕

大友氏の除国後、豊後国は蔵入地となり分割支配された。府内には、文禄3年（1594）に早川長敏が6万石で入封した。慶長2年（1597）になると、早川長敏に替わり、福原直高が豊後臼杵より12万石で入封した。福原直高は、この前年、中世府内町が慶長大地震に伴う津波によって甚大な被害を被っていたこともあり、新城の築城及び近世城下町の建設に着手した。その場所として選定したのは、中世府内町の北西、別府湾に面する「荷落」の地であった。慶長4年（1599）、新城の大半が完成すると、地名を「荷揚」と改め、新城を「荷揚城」と称した。しかし同年、福原直高は徳川家康により改易され、その後再入封した早川長敏も、関ヶ原合戦での敵対関係を理由に取り潰された。

慶長6年（1601）、豊後高田より3万5千石で入封した竹中重利は、徳川家康の許可を得て、城塁の増修築および城下町の建設を再開した。慶長7年（1602）年には、四重天守閣や諸門などの城郭中心部が完成した。城下町は、東西10町35間、南北8町19間に区画され、中世府内町の住民を移住させたとされる。近世城下町は、その後も周辺整備を続け、慶長10年（1605）にほぼ完成し、城名を「府内城」、城下町を「府内」と改めた。寛永11年（1634）竹中氏が改易されると、下野国壬生より日根野吉明が2万石で入封した。日根野吉明は、府内城・城下町の再整備のほかに新田開発を進め、これに伴う用水路の開削（初瀬井路）・整備により、中世大友府内町を含む大分川下流域の広範囲は水田化した。明暦2年（1656）、日根野氏が一代で断絶したため、近世府内は一時的に幕府の管理下に置かれたが、万治元年（1658）になると、松平忠明が2万2千石で入封して府内藩となり、12代を経て明治に至る。

第2章 調査の成果

第1節 発掘調査の概要

今回の調査は、住宅併用病院建設に伴って行われ、遺構に影響する基礎構造物の部分のみを対象とするものである。このため調査区は南北分割し、加えて未掘部分によって細かく分断している。発掘調査面積は約36.25m²である。

調査は重機により遺構検出面まで表土を剥し、建物基礎部分の位置出し後、人力による遺構検出作業及び遺構掘削を行ったものである。

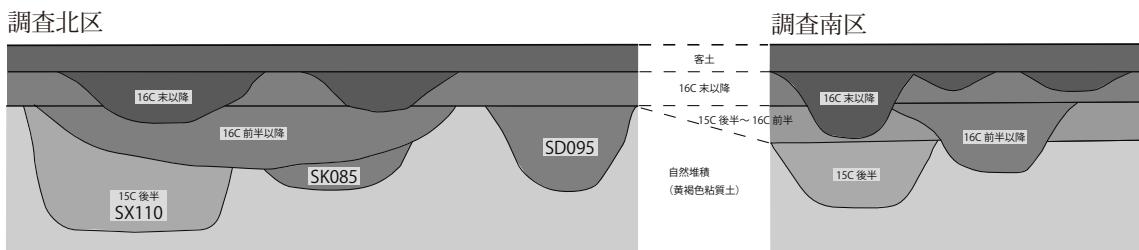
調査区内には中世の遺構面に及ぶ近現代の搅乱は少なく、遺構の保存状態は良好であった。

調査地点は、推定復元想定図の「中之町」の一角にあたり、推定「第1南北街路」より東に11mの位置にあたる。検出された遺構は、16世紀後半以降（第1面）～15世紀後半（第3面）の3時期に分けられ、部分的に整地層と推定される互層堆積が確認された。

基本層序は以下のように大別される。（第3図）

- 1、暗褐灰色（標高5.1m～5.3m・層厚約0.2m）：現代造成土
- 2、暗茶褐灰色砂質土～暗茶褐色砂質土（標高4.86m～5.1m・層厚約0.24m）：整地層
- 3、茶褐灰色粘質土～黄褐色粘質土（標高4.7m～4.86m・層厚約0.16m）：整地層
- 4、黄褐色粘質土（標高4.32m～4.88m）：自然堆積層

（調査南区を基本層序とする。）



第3図 基本土層模式図

整地層は調査南区と北区南端で確認でき、遺構検出面の様相は溝状遺構（SD095）を境として異なり、調査南区南端には明確な互層堆積が確認できた。

第1遺構検出面

調査南区においては、16世紀後半代に比定される遺物を内包した互層堆積を掘り込んで、16世紀末から明治・大正期の遺構が検出される。火災処理を窺わせる焼土や炭化物が大量に埋められる遺構（SK024）や、少量ではあるが二次被熱による釉変が観察される磁器が出土する遺構（SP003等）が確認される。近世段階の遺物は18世紀中頃以降に比定され、17世紀初頭段階の遺物は確認されなかった。

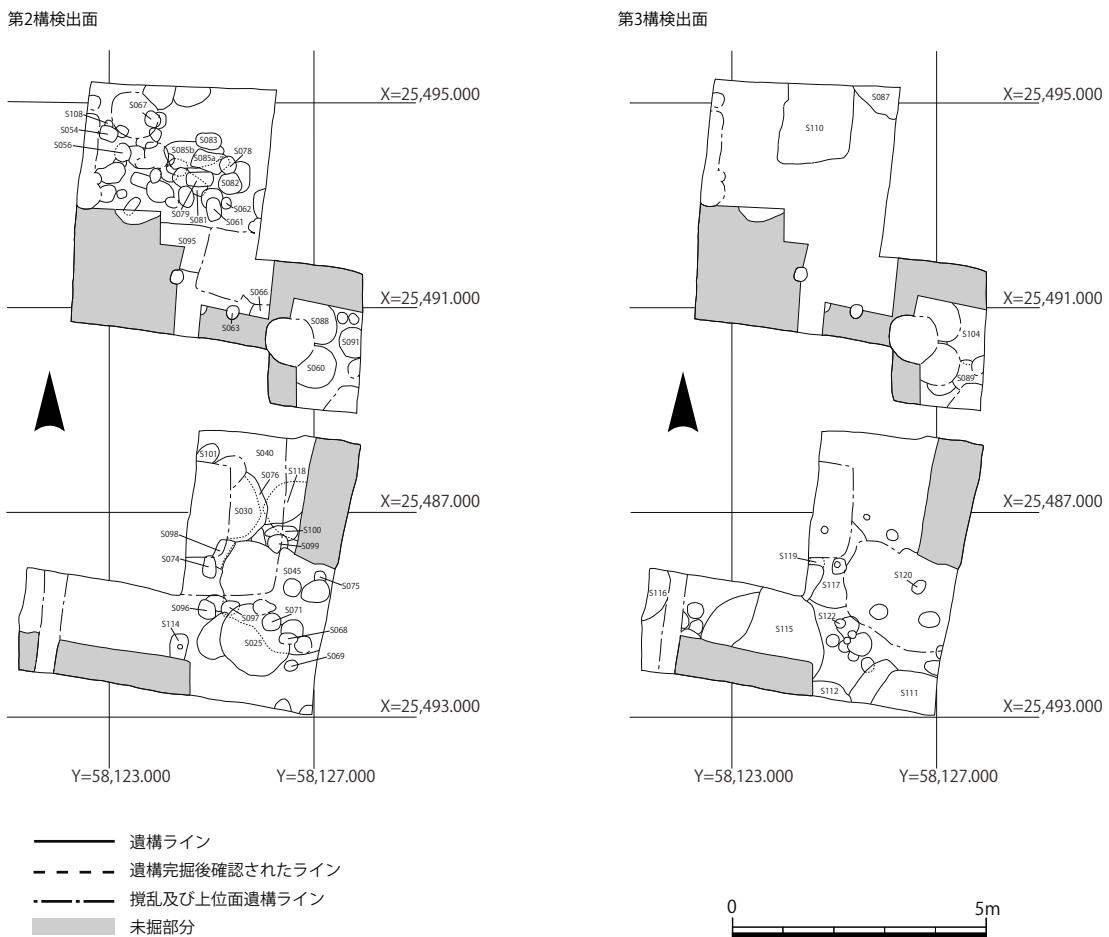
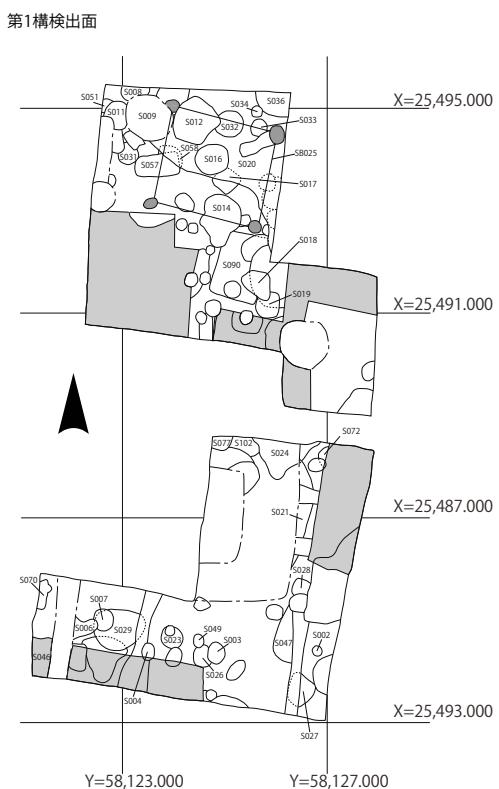
第2遺構検出面

16世紀前半から後半に比定される遺構が検出される。溝状遺構（SD095）を境界とし、北側の遺構は自然堆積層（黄褐色粘質土）を、南側の遺構は整地と推定される互層堆積を掘り込んで確認される。溝状遺構は、推定「第1南北街路」に直行する方位を示す事から敷地を区画する溝と推定される。溝状遺構を挟んで北側には鍛冶関連遺物を内包する廃棄土坑（SK085）が、南側には大型の土坑が検出されたことから、町屋裏手にあたる廃棄空間と推定される。

第3遺構検出面

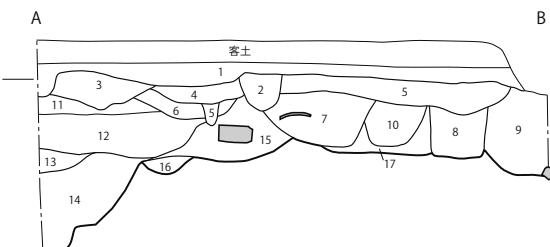
15世紀後半代の遺構が検出される。遺構は自然堆積層（黄褐色粘質土）を掘り込んで遺構が確認される。調査北区において、隅丸方形プランを呈し、南西隅に一段テラスを有する遺構が検出された。遺構は地下式倉庫（SX110）と推定される。第2遺構検出面に比べて遺構密度が低く、町屋の様相は窺えない。

第1遺構検出面において、一部の遺構には火災に由来するとみられる炭化物や焼土を多量に含む土を埋土とする土坑（SK024等）が認められるが、遺構面がこうした土により整地されている状況や、連続する焼土層は確認できなかった。



第4図 遺構変遷図 (S=1/150)

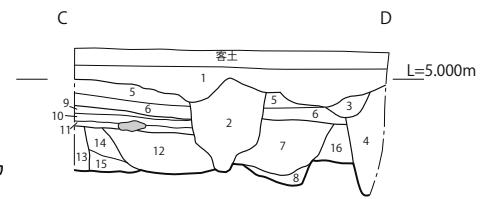
調査北区 東壁土層-1



1. 暗灰褐色土
2. 茶褐色土
3. 茶褐色土 (炭化物・焼土含む)
4. 茶褐色土
5. 茶褐色土
6. 茶褐色土
7. 茶褐色土 (焼土多い・炭化物微量)
8. 黄褐色土 (黄褐色ブロック・炭化物・焼土)
9. 茶褐色土+小砾 (炭化物・黄褐色ブロック含む)

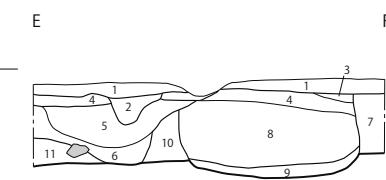
10. 茶褐色土 (焼土・炭化物)
11. 茶褐色土 (黄褐色ブロック・焼土含む)
12. 茶褐色土
13. 茶褐色土 (砂混じり)
14. 茶褐色砂礫
15. 茶褐色土 (底下に焼土・炭化物含む)
16. 黄褐色土 (炭化物・黄褐色ブロック含む)
17. 明茶褐色土 (黄褐色ブロック・焼土含む)

調査北区 東壁土層-2



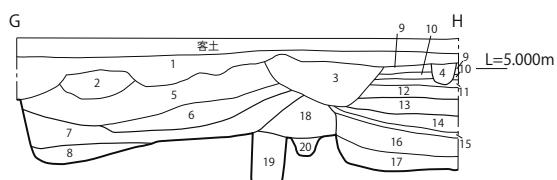
1. 客土
2. 茶褐色土
3. 茶褐色土
4. 灰褐色土
5. 茶褐色土 (下位に砂堆積)
6. 灰褐色土
7. 灰褐色土 (黄褐色ブロック・炭化物含む)
8. 灰褐色土 (黄褐色ブロック・炭化物・焼土)
9. 茶褐色土 (茶褐色ブロック若干含む)
10. 灰褐色砂質土
11. 黄褐色土+灰褐色土ブロック
12. 灰褐色土 (黄褐色ブロック・炭化物含む)
13. 茶褐色土 (黄褐色ブロック含む)
14. 茶褐色土+黄褐色土
15. 明茶褐色土 (黄褐色ブロック土若干含む)
16. 灰褐色土+黄褐色土 (シルト質)
17. 明茶褐色土 (黄褐色ブロック密)
9. 黄褐色土 (茶褐色ブロック若干含む)

調査南区 東壁土層-1



1. 暗灰褐色土 (焼土・炭化物を含む)
2. 茶褐色土 (やや砂質が混じる)
3. 茶褐色砂質土
4. 灰褐色砂質土 (小砾を多量に含む)
5. 暗茶褐色砂質土 (灰色ブロック・炭化物を少量含む)
6. 茶褐色砂質土 (灰褐色砂質土ブロックを含む)
7. 暗灰褐色粘質土 (黄褐色灰色ブロックを含む)
8. 暗茶褐色粘質土 (炭化物少量、黄褐色灰色ブロックを含む)
9. 暗茶褐色粘質土 (第7層より、黄褐色ブロックを多量に含む)
10. 淡灰褐色砂質土
11. 淡茶褐色砂質土 (灰褐色砂質土ブロックを含む)

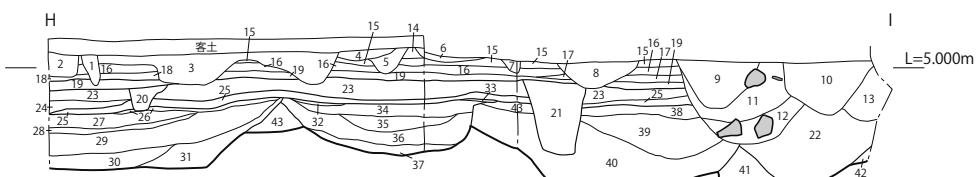
調査南区 東壁土層-2



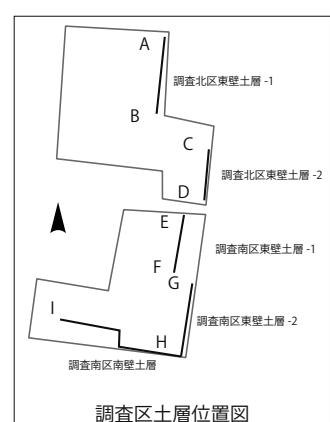
1. 暗褐色灰土 (やや砂質が強い)
2. 灰褐色砂質土 (焼土・炭化物を含む)
3. 灰褐色砂質土 (焼土・炭化物を多量に含む。砂質が強い)
4. 灰褐色砂質土 (焼土・炭化物を含む)
5. 暗茶褐色砂質土 (炭化物を含む)
6. 暗茶褐色砂質土 (砂質を含み、炭化物が混じる)
7. 暗茶褐色砂質土 (砂質土を多量に混じる。炭化物の集中が見られる)
8. 淡灰褐色砂質土 (炭化物・茶褐色土を含む)
9. 黄褐色砂質土
10. 淡茶褐色砂質土 (砂利・粗砂を多量に含む)
11. 淡茶褐色砂質土 (やや淡い)
12. 茶褐色砂質土 (砂質が強い)
13. 茶褐色砂質土 (黄褐色・灰褐色ブロックを含み、炭化物・焼土が少量混じる)
14. 茶褐色砂質土 (やや淡い)
15. 暗茶褐色砂質土 (黄褐色・灰褐色ブロックを含む)
16. 黑茶褐色土 (焼土・炭化物を多量に含む)
17. 黑茶褐色土 (焼土・炭化物を多量に含む)
18. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
19. 黑茶褐色土 (第20層より淡く、炭化物・焼土・黄褐色ブロック(0.10mm)を多量に含む)
20. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
21. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
22. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
23. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
24. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
25. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
26. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
27. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
28. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
29. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
30. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
31. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
32. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
33. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
34. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
35. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
36. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
37. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
38. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
39. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
40. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
41. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
42. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)

12. 茶褐色砂質土 (砂質が強い)
13. 暗茶褐色土 (茶褐色砂質土を含む)
14. 暗茶褐色土 (粗砂・砂・黄褐色砂質土ブロックを含む)
15. 暗茶褐色砂質土 (黄褐色砂質土を含む)
16. 暗茶褐色砂質土 (炭化物を含む)
17. 暗茶褐色砂質土 (灰褐色砂質土ブロックを含む)
18. 暗茶褐色砂質土 (灰褐色砂質土ブロックを多量に含む。砂質が強い)
19. 暗茶褐色砂質土 (粗砂・茶褐色土・灰褐色砂質土を含む)
20. 暗茶褐色砂質土 (炭化物・焼土をわずかに含み、砂質が混じる)
21. 淡茶褐色砂質土 (第22層より暗)

調査南区 南壁土層



1. 暗褐色灰土
2. 暗褐色土 (やや淡い)
3. 茶褐色砂質土 (砂質土・黄褐色ブロックを含み、炭化物・焼土が少量混じる)
4. 茶褐色土
5. 暗茶褐色土 (黄褐色・灰褐色ブロックを含む)
6. 暗茶褐色土 (やや砂質が強い)
7. 淡茶褐色砂質土 (炭化物を含む)
8. 茶褐色土 (やや砂質・炭化物・焼土を含む)
9. 黑茶褐色土 (焼土・炭化物を多量に含む)
10. 黑茶褐色土 (焼土・炭化物を多量に含む)
11. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
12. 黑茶褐色土 (やや淡い・炭化物・焼土・黄褐色ブロックをわずかに含む)
13. 黑茶褐色土 (第20層より淡く、炭化物・焼土・黄褐色ブロック(0.10mm)を多量に含む)
14. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
15. 黑茶褐色土 (粗砂・砂を多量に含む、灰褐色砂質ブロックをわずかに含む)
16. 黑茶褐色土 (黄褐色ブロック(0.10mm)・炭化物・焼土を多量に含む、黄褐色ブロックを密に含む部分あり)
17. 淡茶褐色土 (炭化物を含み、しまっている。炭化物・焼土を微量に含む)
18. 淡茶褐色土 (砂利・粗砂を多量に含む)
19. 淡茶褐色土 (砂質を含む)
20. 黑茶褐色土 (炭化物を含む)
21. 黑茶褐色土 (粗砂を含み、わずかに茶褐色土が混じる)
22. 黑茶褐色土 (灰褐色ブロック・炭化物・粗砂を含む)
23. 黑茶褐色土 (やや淡く、わずかに炭化物を含む、粘質土を含む)
24. 淡茶褐色土 (茶褐色砂質土を含む)
25. 黄褐色砂質土
26. 黄褐色砂質土 (粗砂・黄褐色ブロックを多量に含む)
27. 淡茶褐色土 (粗砂・砂・黄褐色砂質土を含む)
28. 淡茶褐色土 (黄褐色砂質土を含む、ややしまっている)
29. 淡茶褐色土 (粗砂・灰褐色砂質土ブロックを含む)
30. 淡茶褐色土 (灰褐色砂質土ブロックを多量に含み、砂質が強く、炭化物が集中)
31. 淡茶褐色土 (茶褐色土と灰褐色粘質土を含む)
32. 黑茶褐色土
33. 粗砂
34. 茶褐色砂質土 (粗砂含む)
35. 茶褐色砂質土 (層下位に炭化物・黄褐色ブロックのを密に含む)
36. 茶褐色砂質土 (炭化物をわずかに含み、灰褐色ブロックを多量に含む)
37. 茶褐色砂質土 (第39層より暗、灰褐色ブロックを少量含む)
38. 淡茶褐色土 (粗砂を含み、茶褐色砂質土を含む)
39. 淡茶褐色土 (灰褐色ブロックを含み、炭化物が少量混じる)
40. 茶褐色砂質土 (灰褐色・黄褐色砂質土ブロックを多量に含み、炭化物を少量含む)
41. 淡茶褐色砂質土 (茶褐色土・灰褐色砂質土を含む)
42. 淡茶褐色砂質土 (粗砂・砂を多量に含み、灰褐色ブロックを多量に含む)



0 2m

第5図 調査区壁土層図 (S=1/50)

第2節 第1遺構検出面

調査南区においては、16世紀後半代に比定される遺物を内包した互層堆積を掘り込んで、16世紀末から明治・大正期の遺構が検出される。火災処理を窺わせる焼土や炭化物が大量に埋められる遺構（SK024）や、少量であるが二次被熱による釉変が観察される磁器が出土する遺構（SP003等）が確認される。近世段階の遺物は18世紀中頃以降に比定され、17世紀初頭段階の遺物は確認されなかった。



第6図 第1遺構面完掘図 (S=1/80)

調査北区遺構

SB025 (第6図 B-2区)

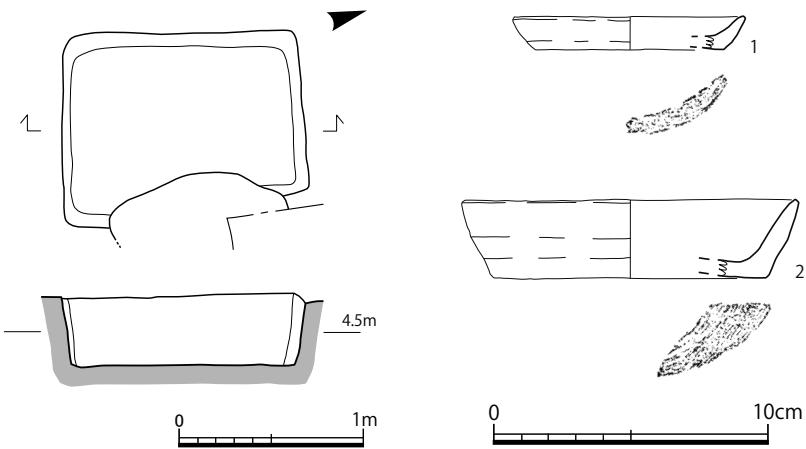
B-2区で検出した掘立柱建物跡で東西方向に長軸を持つと推測される。東西方向及び北方向が調査区外に延びると推測される。主軸方向はN-12°-Eである。桁行1間+ α 、梁行1間+ α 、確認された身舎面積は3.6m²である。出土遺物がみられないことから時期の確定はできないが、切り合い関係から16世紀末以降と推測される。

SK090 (第7図)

B-2区で検出され、SK084等に切られる方形土坑である。長軸約1.3m、短軸1.2m、検出面からの遺構深度は約0.4mを測る。黄褐色ブロックを密に含む暗茶褐色粘土で埋積している。切りあい関係から16世紀後半以降に比定される。

SK090出土遺物 (第8図)

1は、土師器皿。2は、土師器壺。いずれも、底部に回転糸切り離し痕が観察できる。底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。15世紀代に遡ると考えられ、混入品の可能性が高い。



第7図 SK090平面図・断面図
(S=1/40)

第8図 SK090出土遺物実測図
(S=1/3)

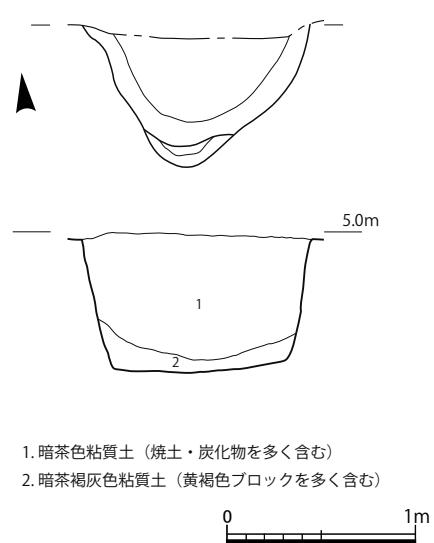
調査南区遺構

SK024 (第9図)

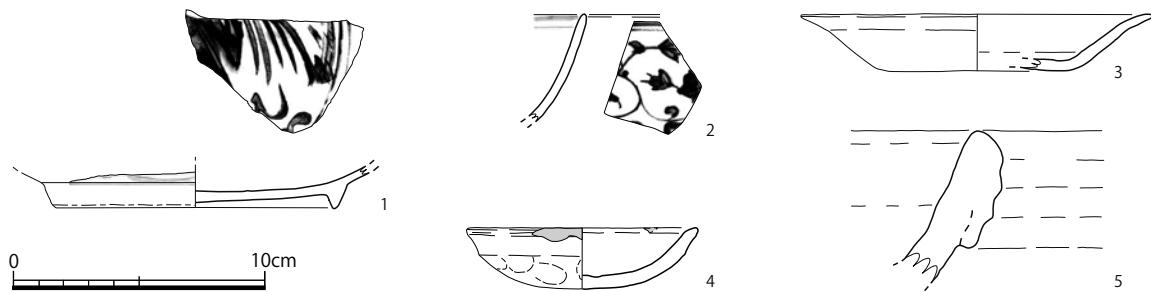
C-2区で検出され、北側は調査区外に延びる不整形の土坑である。長軸約1.2m+ α 、短軸約0.6m+ α 、検出面からの深度は約0.74mを測る。焼土ブロック・炭化物を密に含む茶褐色粘質土(第1層)、暗茶褐色粘質土(第2層)で埋積されており、火災処理に使用された可能性が考えられる。出土遺物から16世紀後半以降に比定される。

SK024出土遺物 (第10図)

1は、漳州窯系五彩皿。胎土は陶土に近く、畳付は釉剥ぎが施される。16世紀後半～末に比定される。2は、景德鎮窯系青花碗。小野分類染付碗E群。3・4は、京都系土師器皿。3は、口径約14cm、器高2.2cm、器壁は0.4cmと薄い。塩地編年第1期に比定される。混入品と考えられる。4は、器高2.6cm、器壁は0.6cm、口縁部が短く外反する。塩地編年第2期に比定される。5は、備前焼大甕。口縁部は玉縁状を呈し、外面にヨコナデによる凹線が観察される。乗岡編年近世I期bと並行する時期か。



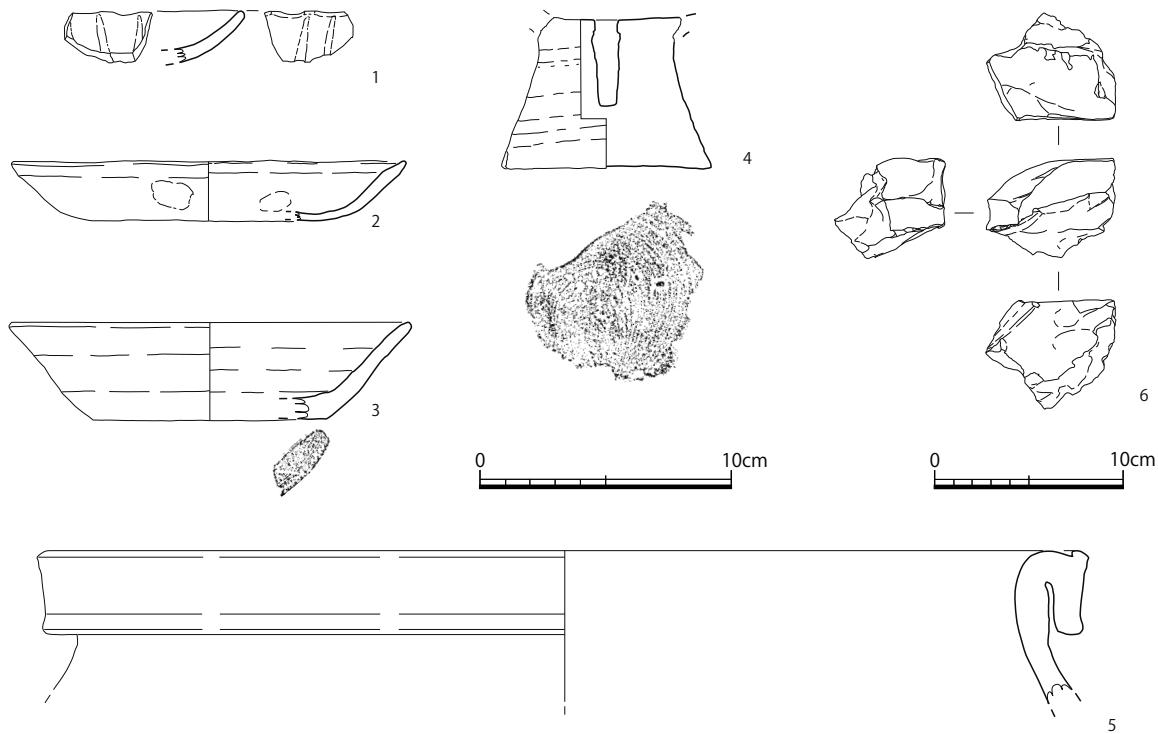
第9図 SK024平面・土層図 (S=1/40)



第10図 SK024出土遺物実測図 (S=1/3)

SK029出土遺物 (第11図)

1は、中国産白磁稜花皿。表面には貫入が観察され、内外面にヘラによる片彫りが施される。2は、京都系土師器皿。口径約15cm、器高2.4cm、器壁は0.4cmと薄い。塩地編年第1期に比定される。混入品と考えられる。3は、土師器坏。口径約16cm、器高3.8cm、器壁は0.6cm。底部は回転糸切り離し。内外面にナデによる稜が、わずかに観察できる。16世紀前半か。4は、土師質土器燭台。底部は回転糸切り離し、台部はヨコナデ調整による稜が形成される。色調は京都系土師器皿に似たにぶい黄橙。見込み中央部を穿孔し、底部までは貫通しない。5は、常滑産陶器甕。口縁部が「N」字状に屈曲する。帯幅は4cmを測る。14世紀代に比定される。6は、瓦片。鳥食部分と考えられる。



第11図 SK029出土遺物実測図 (1 ~ 4: S=1/3, 5 ~ 6: S=1/4)

SK070出土遺物 (第12図-1・2)

1は、景德鎮窯青花皿。外面高台境と見込みに各2条の界線。見込みに雲鶴文、高台内には「長□□貴」と染付される。小野分類染付皿E群に比定される。2は、京都系土師器皿。口径12.2cm、器高2.4cm、器壁は0.6cm、口縁部が大きく外反する。塩地編年第2期に比定される。

SP003出土遺物（第12図-3・4）

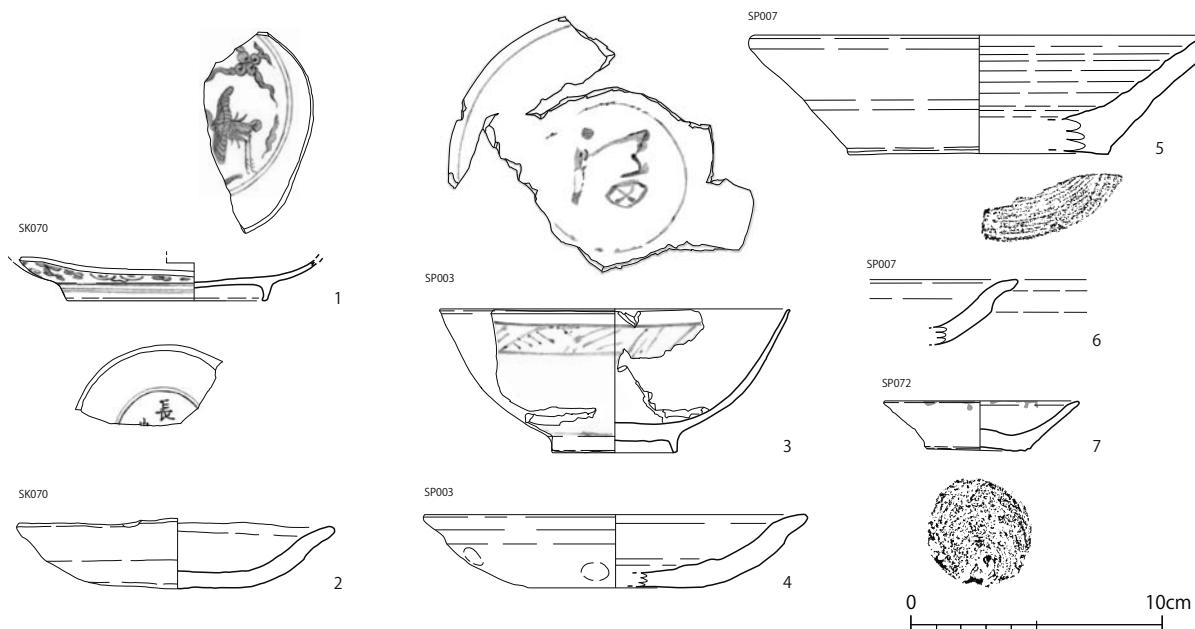
3は、漳州窯系青花碗。体部下半からやや内湾しつつ立ちあがる。器壁は薄く、高台内は露胎である。見込みには「福」の字が染付けされている。二次被熱による釉変が観察される。4は、京都系土師器皿。内面の最終調整にナデアゲが施される。塩地編年第2期に相当し、16世紀後半に比定される。

SP007出土遺物（第12図-5・6）

5は、「口クロ目」土師器環で、口径約18.4cm、器高は4.7cmを測る大型の環である。底部は回転糸切り離し、体部内面にはヨコナデによる明瞭な稜が形成される。胎土には金雲母が観察される。16世紀前半代か。6は、京都系土師器皿。口縁端部が強く外反する。内面には煤が付着している。塩地編年第2期か。

SP072出土遺物（第12図-7）

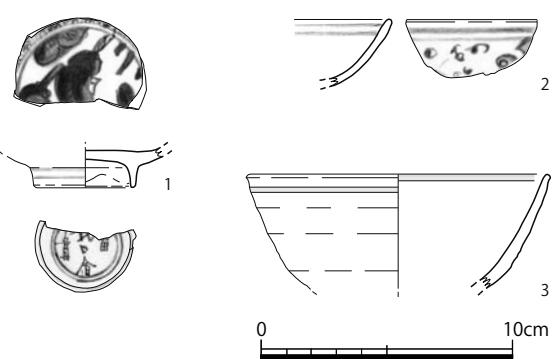
7は、土師器皿で、底部は回転糸切り離し、体部内外面には丁寧なナデが施される。見込み部分がわずかに盛り上がる。16世紀前半代か。



第12図 SK070・SP003・007・072出土遺物実測図 (S=1/3)

第1遺構検出面整地層出土遺物（第13図）

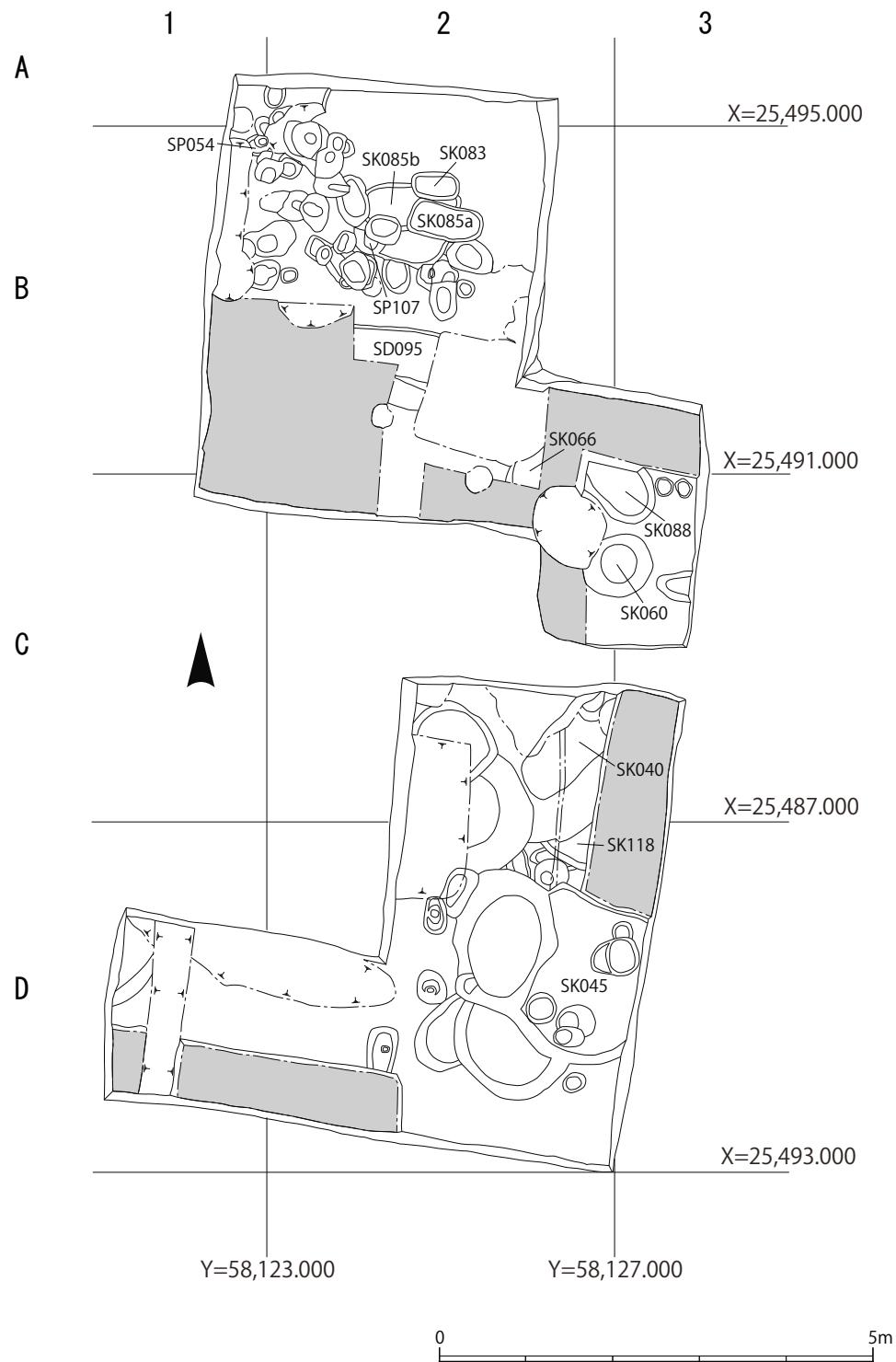
1は、景德鎮窯系青花碗。見込みが「饅頭心」を呈する小野分類染付碗E群に相当し、16世紀中頃以降に比定される。染付で見込みに「人物」が描かれ、高台内には「長命富貴」と記される。2は、景德鎮窯系青花皿。小野分類染付皿E群に相当し、16世紀後半以降に比定される。二次被熱による釉変が観察できる。3は、漳州窯系染付碗。体部が内湾しながら立ち上がる。呉須の発色は悪く、胎土は陶土である。



第13図 第1遺構検出面出土遺物実測図 (S=1/3)

第3節 第2遺構検出面

16世紀前半から後半に比定される遺構が確認できる。溝状遺構（SD095）を境界とし、北側の遺構は自然堆積層（黄褐色粘質土）を、南側の遺構は整地層を掘り込んで遺構が検出された。溝状遺構は、推定「第1南北街路」に直行する方位を示す事から敷地を区画する溝と推定される。溝状遺構を挟んで北側には鍛冶関連遺物を内包する廃棄土坑（SK085）が、南側には大型の土坑が検出されたことから、町屋裏手の廃棄空間にあたると推定される。



第14図 第2遺構面完掘図 (S=1/80)

調査北区遺構

SD095 (第15図)

B-2区で検出され溝状遺構である。検出した長さは約1.1m、幅0.9mを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの遺構深度は約0.4mを測る。土層断面を精査したところ掘り返しが確認でき、茶褐色砂質土を基調とする第1・2層、灰褐色土を基調とする第3～6層とに大別された。埋土の最下層（第6層）は若干粘質を帯びるが、滯水の様子は見られないため水路等の施設とは考えにくい。調査の制約上一部の検出に止まったが東西方向に延びると推定でき、何らかの区画施設と考えておきたい。遺構の切り合い関係から16世紀前半に比定される。

SD095出土遺物 (第16図)

1・2は土師器坏。底部は回転糸切り離し。体部が斜め上方に開き口縁部がやや外反する。15世紀代に比定され、混入品の可能性が考えられる。

SK060 (第17図)

C-2・3区で検出される円形の土坑である。直径約0.83m、検出面からの深度は約0.6mを測る。

SK060出土遺物 (第18図-1)

1は、土師器燭台。底部は回転糸切り離し、台部はヨコナデ調整による稜が形成される。見込み中央部を穿孔し、底部までは貫通しない。

SK066 (第17図)

B・C-2区で検出されSK018・087に切られる楕円形の土坑である。長軸約 $0.44m + \alpha$ 、短軸約 $0.3m + \alpha$ 、検出面からの深度は約0.28mを測る。黄褐色ブロックを密に含む灰褐色土で埋積されている。出土遺物から16世紀前半に比定される。

SK066出土遺物 (第18図-2・3)

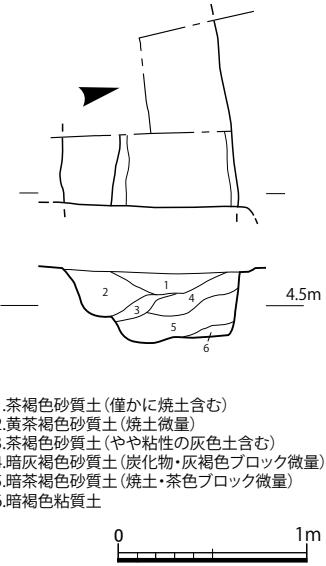
2は、「ロクロ目」土師器坏で、底部は回転糸切り離し。体部内面にはヨコナデによる明瞭な稜が形成される。16世紀前半。3は、土師器坏。底部は回転糸切り離し。体部が斜め上方に開く。15世紀代に比定され、混入品と考えられる。

SK083 (第17図)

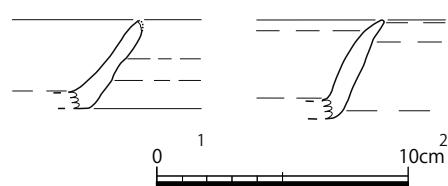
B-2区で検出される楕円形の土坑である。長軸約 $0.55m + \alpha$ 、短軸約 $0.34m$ 、検出面からの深度は約0.32mを測る。黄褐色ブロックと炭化物を多量に含む暗灰褐色土で埋積されている。出土遺物から16世紀前半に比定される。

SK083出土遺物 (第18図-4)

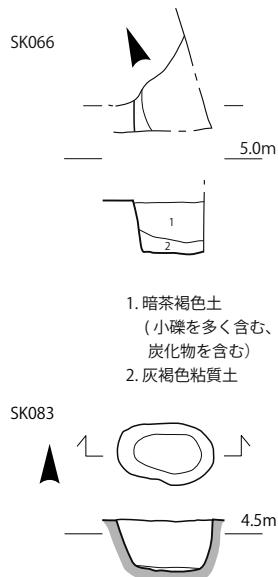
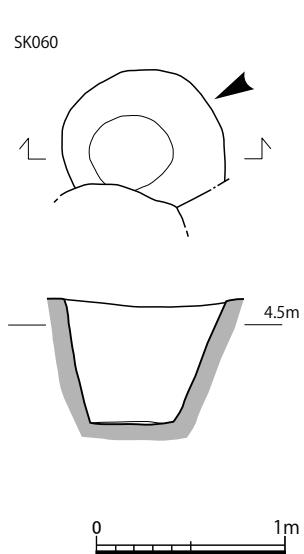
4は、土師器皿。取瓶として転用されたと考えられる。口縁部から外面体部にかけて鉄滓の付着が観察される。底部は回転糸切り離し。



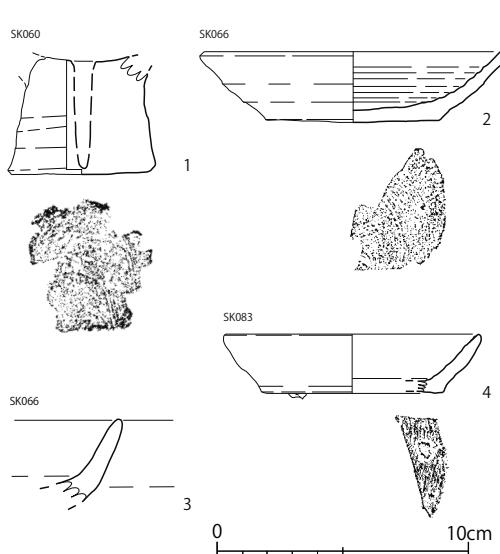
第15図 SD095平面・土層図 (S=1/40)



第16図 SD095出土遺物実測図 (S=1/3)



第17図 SK060・066・083平面・断面図 (S=1/40)



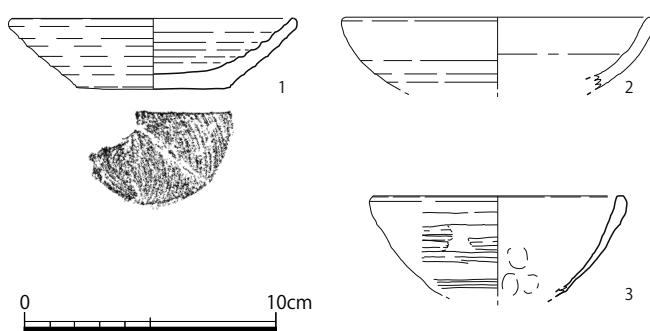
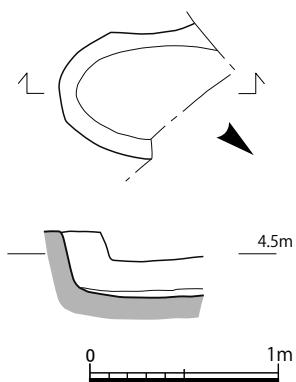
第18図 SK060・066・083出土遺物実測図 (S=1/3)

SK088 (第19図)

B・C-2・3区で検出される楕円形の土坑である。長軸約 $0.93m + \alpha$ 、短軸約 $0.68 + \alpha$ 、検出面からの深度は約0.36mを測る。黄褐色ブロックを密に含む暗灰褐色土で埋積されている。出土遺物から16世紀前半に比定される。

SK088出土遺物 (第20図)

1は、「ロクロ目」土師器坏で、底部は回転糸切り離し。体部内外面にヨコナデによる明瞭な稜が形成される。16世紀前半に比定される。2は、土師器坏。体部が内湾して口縁部にかけて直立気味に立ち上がり、口縁部は丸みを帯びる。内外面ともにヨコナデを施し、胎土には金雲母が含まれる。3は、瓦質土器の碗。体部は器壁が薄く口縁部は肥厚する。口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラ削りの後、横方向に磨きを施す。内面は指オサエの後、ナデを施す。



第19図 SK088平面・断面図 (S=1/40)

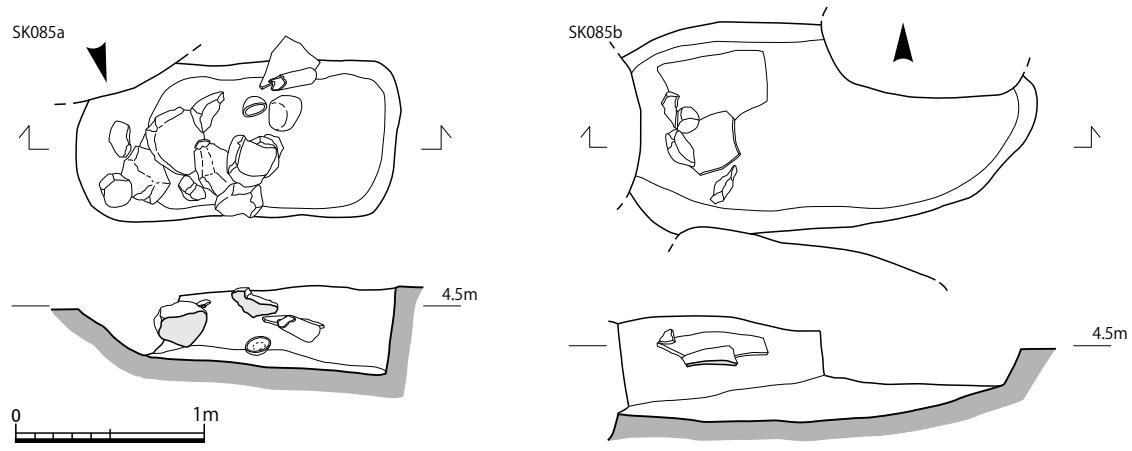
第20図 SK088出土遺物実測図 (S=1/3)

SK085a (第21図)

B-2区で検出され、SK078に切られる楕円形土坑である。長軸 $0.87m$ 、短軸 $0.4m$ 、検出面からの遺構深度は約0.24mを測る。焼土ブロックと炭化物を密に含む黄茶褐色砂質土で埋積している。遺物は坩堝・フイゴの羽口・銅塊が出土しており、鍛冶関連遺物を廃棄した土坑である。切りあい関係から16世紀前半代に比定される。

SK085b (第21図)

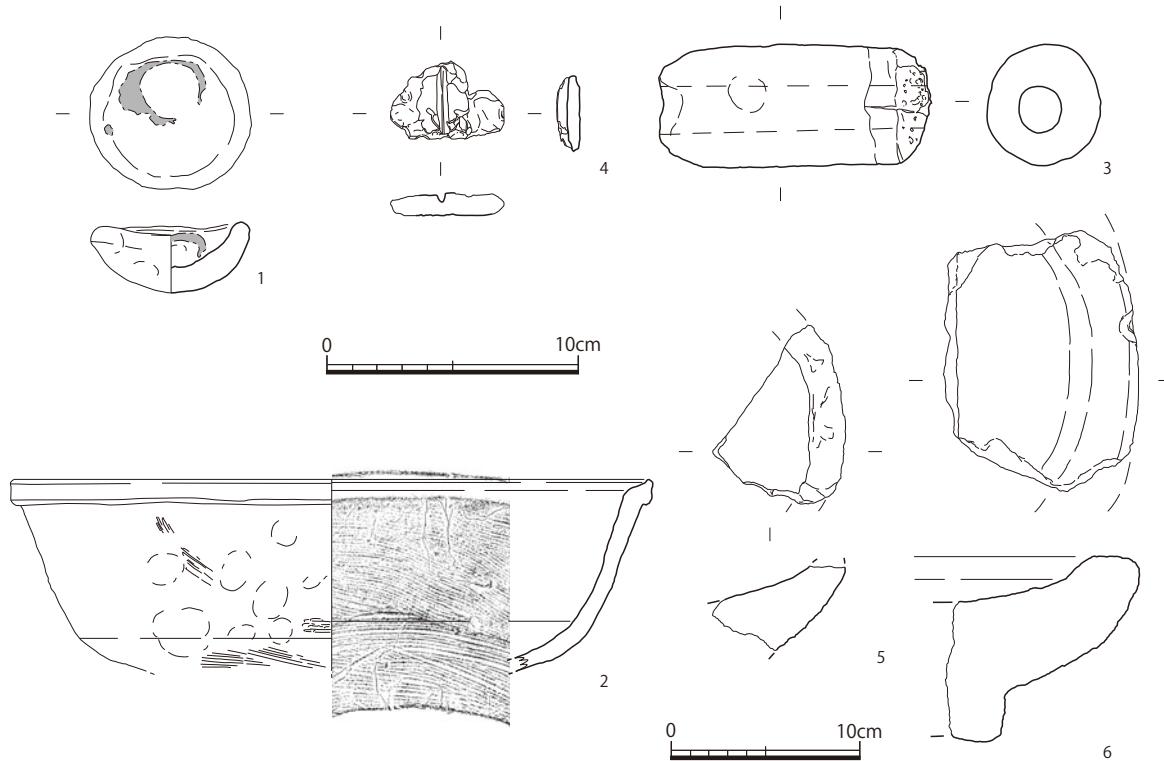
B-2区で検出され、SK083・085aに切られる橢円形土坑である。長軸1.3m+ α 、短軸0.6m+ α 、検出面からの遺構深度は約0.3mを測る。焼土ブロックと炭化物を密に含む灰褐色砂質土で埋積している。遺物は備前焼大甕胴部が出土している。切り合い関係から16世紀前半代に比定される。



第21図 SK085平面・断面図 (S=1/40)

SK085a出土遺物 (第22図)

1は、土製の坩堝。鉱滓が内面に付着しており、鉱物を取り外した痕跡が観察される。2は、瓦質土器鍋。口縁部は玉縁状を呈し、端部を若干つまみあげる。体部内面に刷毛目を施し、外面は指オサエが施される。3は、土製の鞴羽口。先端部は被熱によって焼けただれる。残存長は10.6cm、通気口の内径は1.8cmを測る。4は、銅塊。中央部に削り痕が観察される。銅製品とは考えられず、これを溶かして加工するための素材ではないかと考える。5は茶臼の下臼片で石材は安山岩。6は、粉挽き臼の下臼片で石材は安山岩。



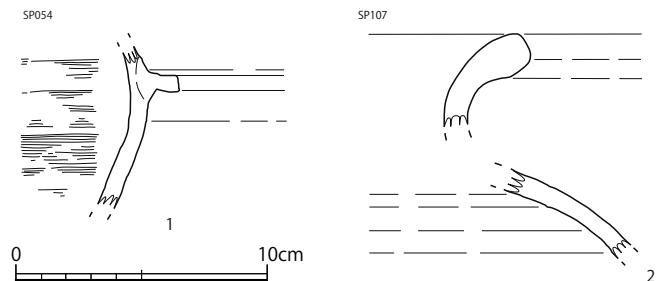
第22図 SK085a 出土遺物実測図 (1・3・4: S=1/3、2・5・6: S=1/4)

SP054出土遺物（第23図-1）

1は、瓦質土器羽釜の体部片で、鍔が巡る。内外面ともにヨコナデが施される。外面には煤が観察できる。

SP107出土遺物（第23図-2）

中国産陶器壺の口縁部及び、肩部片である。肩部には三条の沈線が巡る。



第23図 SP054・107出土遺物実測図 (S=1/3)

調査南区遺構

SK040（第24図）

C-2区で検出される楕円形の土坑である。南西部はSO30に切られ、北東部は調査区外に延びる。長軸約1.54m + α 、短軸約1.5m + α 、検出面からの深度は約0.44mを測る。出土遺物から15世紀後半～16世紀前半に比定される。

SK040出土遺物（第25図-1）

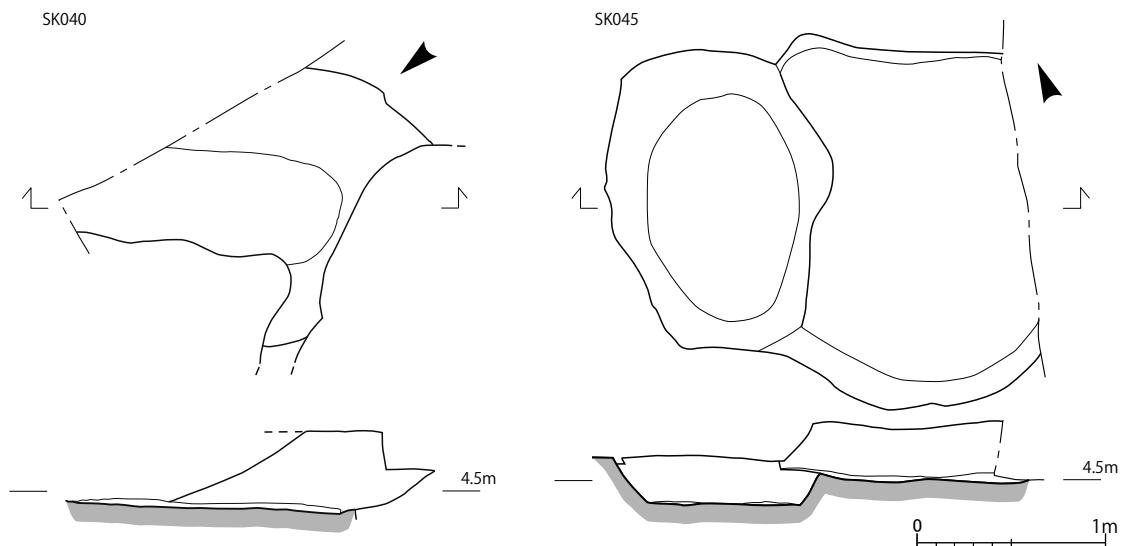
1は、「ロクロ目」土師器壺で、底部は回転糸切り離し。体部内面にはヨコナデによる明瞭な稜が形成される。16世紀前半代に比定される。

SK045（第24図）

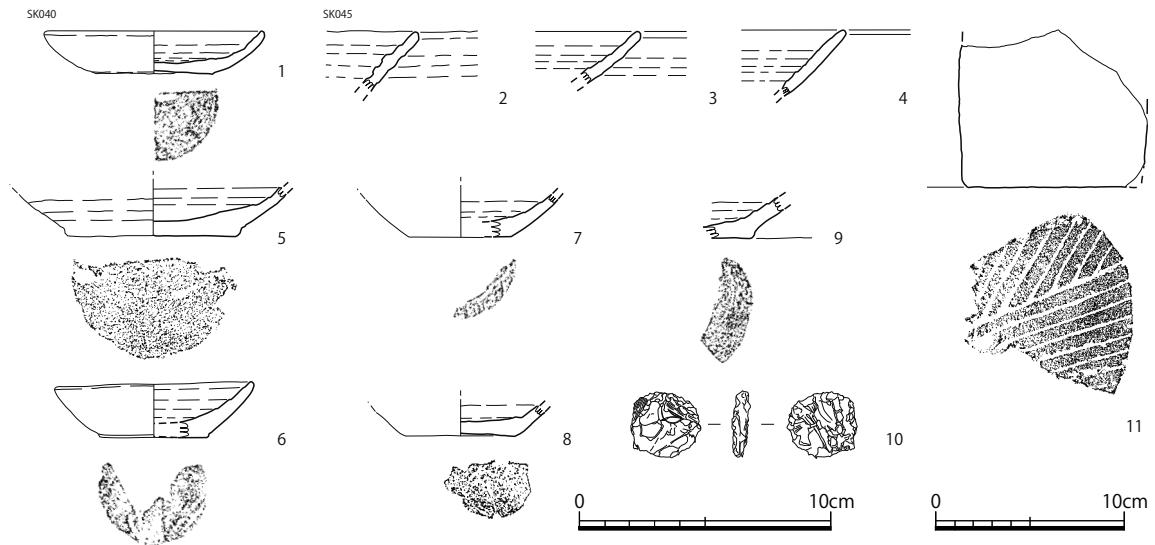
D-2区で検出される不定楕円形の土坑である。SK025・098に切られ、東部は調査区外に延びる。長軸約2.28m + α 、短軸約1.86m + α 、検出面からの深度は約0.32～0.58mを測る。床面は基本的に水平であるが、西半分が0.26m下がる段差を有する。平面検出では確認できなかった切り合い関係が推測される。出土遺物から16世紀前半に比定される。

SK045出土遺物（第25図-2～9）

2～9は、「ロクロ目」土師器。2～4は壺の口縁部片、外傾しながら直線的に立ち上がる。体部内面にはヨコナデによる明瞭な稜が形成される。5は壺の底部片。回転糸切り離し、体部内面にはナデによる明瞭な稜が形成される。6～9は皿の底部片。6・7は底部回転糸切り離し後の板状圧痕が観察される。16世紀前半代に比定される。10は、銅錢。熔解中に付着した木質が観察できる。11は、粉挽き臼の上臼片。石材は安山岩、芯棒受け部分が残存する。



第24図 SK040・045平面・断面図 (S=1/40)



第25図 SK040・045出土遺物実測図 (1~10: S=1/3, 11: S=1/4)

SK118 (第26図)

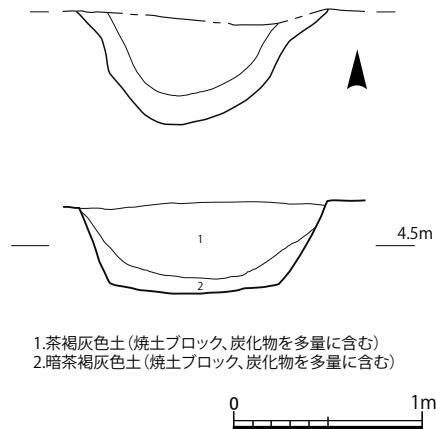
D-2区で検出される楕円形の土坑と推定される。東側は調査区外に延びる。長軸約1.34m、短軸約0.6m + α 、検出面からの深度は約0.51mを測る。焼土ブロック・炭化物を密に含む茶褐色を基調とした土で埋積される。出土遺物から16世紀前半に比定される。

SK118出土遺物 (第27図)

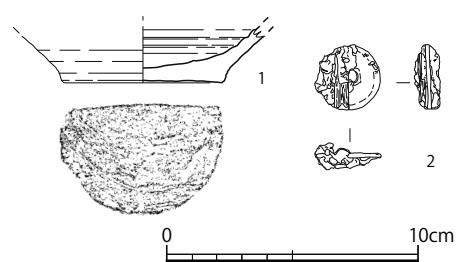
1は、「ロクロ目」土師器坏。底部は回転糸切り離し。体部内面にはヨコナデによる明瞭な稜が形成される。16世紀前半に比定される。2は、銅錢。熔解中に付着した木質が観察できる。

第2遺構検出面整地層出土遺物 (第28図)

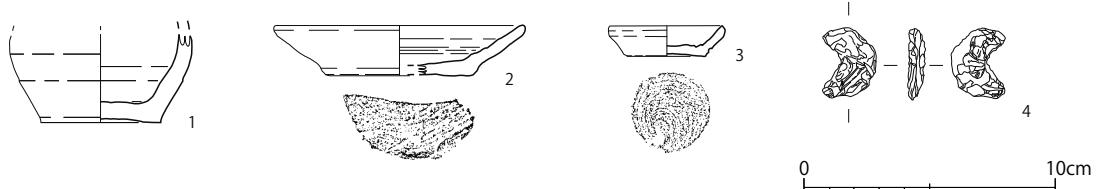
1は、備前焼小壺。底部から体部片。粘土紐接合痕が観察される。2は、「ロクロ目」土師器坏で、底部は回転糸切り離し後の板状圧痕が観察される。体部内面にはヨコナデによる明瞭な稜が形成される。16世紀前半に比定される。3は、「ロクロ目」土師器皿で、口径は4.5cm、器高1.1cmを測る。底部は回転糸切り離し。見込み部にはナデによる明瞭な稜が形成される。胎土には金雲母が観察される。16世紀前半の法量分化の様子が窺える。4は、銅錢。二次被熱による表面の熔解が観察される。



第26図 SK118平面・断面図 (S=1/40)



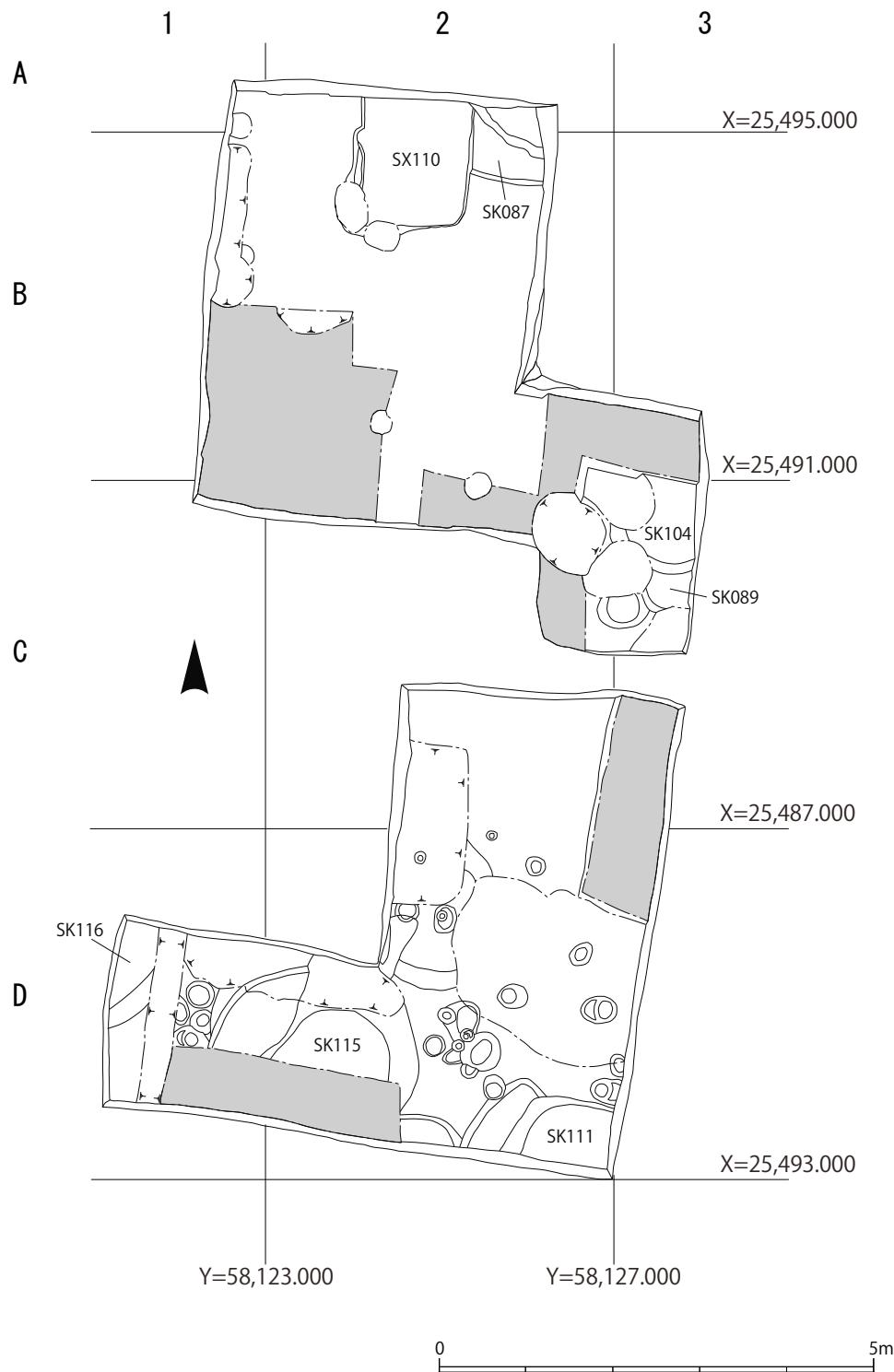
第27図 SK118出土遺物実測図 (S=1/3)



第28図 第2遺構検出面整地層出土遺物実測図 (S=1/3)

第4節 第3遺構検出面

15世紀後半代の遺構が検出される。遺構は自然堆積層（黄褐色粘質土）を掘り込んで遺構が確認される。調査北区において、隅丸方形プランを呈し、南西隅に一段テラスを有する遺構が検出された。遺構は地下式倉庫（SK110）と推定される。遺構密度は低い。調査南区で確認された遺構の中には、平面検出の不十分さから、第2遺構検出面で検出される遺構を含む可能性が考えられた。今回の報告では、調査区土層及び、出土遺物で検証できた遺構のみを報告している。



第29図 第3遺構面完掘図 (S=1/80)

調査北区遺構

SK087（第30図）

A・B-2区で検出される楕円形の土坑である。長軸約 $1.05\text{m} + \alpha$ 、短軸約 $0.5\text{m} + \alpha$ を測る。検出面からの深度は約 0.58m を測る。

SK087出土遺物（第31図-1）

1は、土師器坏。体部下半外面に強いヨコナデが施される。15世紀後半代と推定される。

SK089（第30図）

C-3区で検出され、SK060に切られる楕円形の土坑である。長軸約 $0.6\text{m} + \alpha$ 、短軸約 0.6m 、検出面からの深度は約 0.3m を測る。黄褐色ブロックを密に含む灰褐色土（第1層）、暗灰褐色土（第2層）で埋積されている。

SK089出土遺物（第31図-2～5）

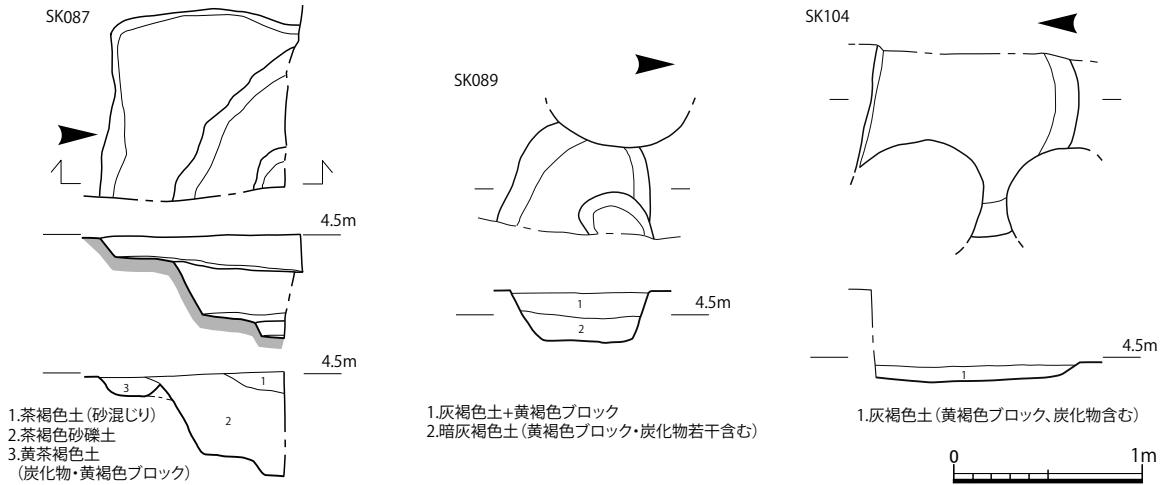
2は、龍泉窯系青磁皿。腰折れの稜花皿で、表面には貫入が観察される。口縁部内面には平行花文が片彫りされる。3は、土師器坏の口縁部片。4は、土師質土器燭台。底部は回転糸切り離し後、丁寧にナデ消している。台部はヨコナデ調整による稜が形成される。見込み中央部を穿孔し、底部までは貫通しない。5は、備前焼壺。口縁部が玉縁状を呈し、頸部が直立気味に立ち上がる。15世紀前半代に比定され混入品と推定される。

SK104（第30図）

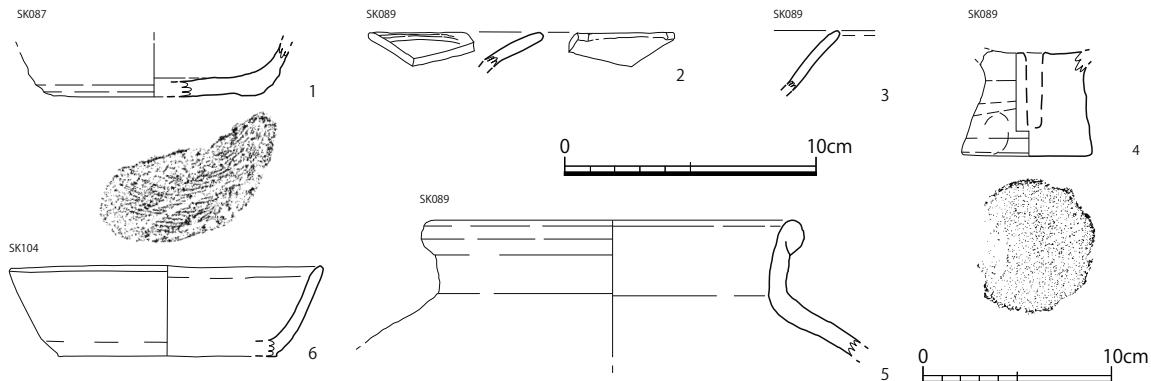
C-3区で検出されSK060・088・089に切られる楕円形の土坑である。長軸約 $1.06\text{m} + \alpha$ 、短軸約 0.9m 、検出面からの深度は約 0.1m を測る。黄褐色ブロック及び炭化物を含む灰褐色土で埋積されている。

SK104出土遺物（第31図-6）

6は、土師器坏の口縁部片。底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。15世紀代に比定される。



第30図 SK087・089・104平面・土層図 (S=1/40)



第31図 SK087・089・104出土遺物実測図 (1～4・6: S=1/3、5: S=1/4)

SX110 (第32図)

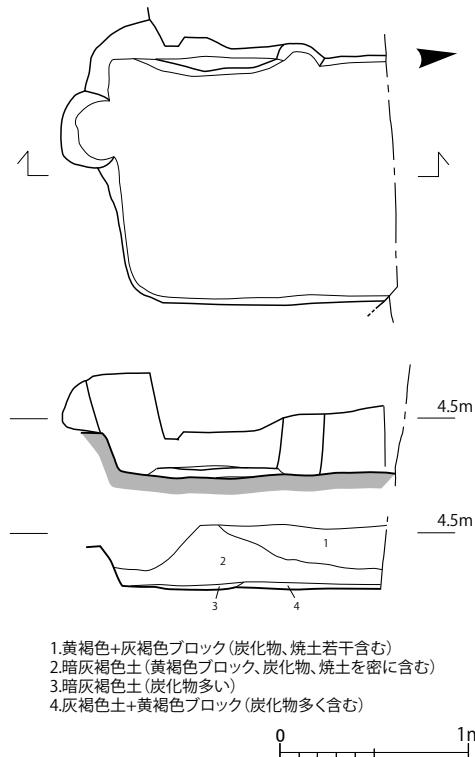
A・B-2区で検出され、長軸約1.58m + α 、短軸約1.3mを測る隅丸方形の土坑である。遺構南西部に若干の張り出し部分が確認でき、テラスを有する。遺構は黄褐色粘質土（自然堆積層）をほぼ垂直に掘り込んでおり、検出面からの深度は約0.56mを測る。黄褐色ブロック土を密に含む層（第1・2層）で埋積され、最下（第3・4層）には、炭化物を多く含んだ薄い堆積層か確認される。出土遺物は在地系土師器坏が出土しており、埋積時期は15世紀後半と推定される。

SX110出土遺物（第33図）

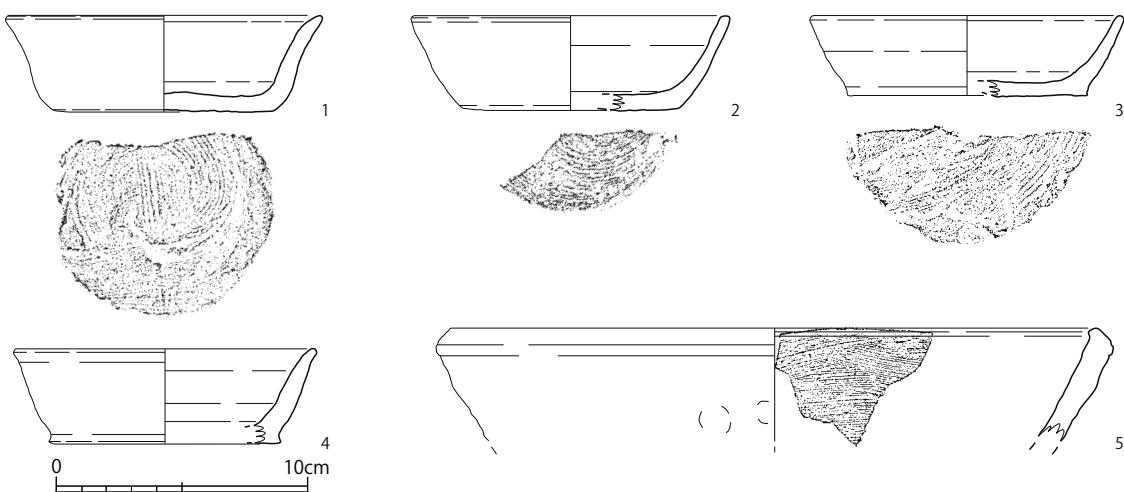
1～4は、土師器坏。1・2は、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、体部下半外面に強いヨコナデが施される。15世紀後半に比定される。3・4は、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。3には、底部糸切り後の板状圧痕が観察される。5は、土師質鉢か。外面はナデが施され、内面には刷毛目が施される。

SX110半截時出土遺物（第34図）

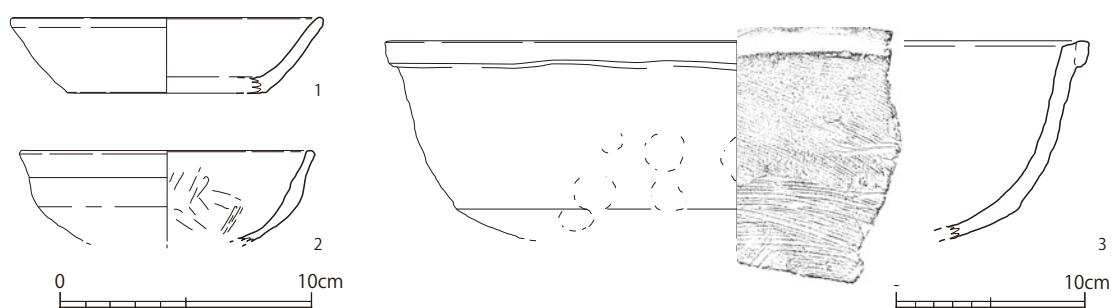
1は、土師器坏。底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、端部はやや外反する。2は、器種不明。外面は煤が付着している。内面は部分的に磨きが施される。3は、瓦質土器鍋。口縁部は玉縁状を呈す。体部内面に刷毛目を、外面は指オサエが施される。



第32図 SX110平面・断面・土層図 (S=1/40)



第33図 SX110出土遺物実測図 (1～4: S=1/3、5: S=1/4)



第34図 SX110半截時出土遺物実測図 (1・2: S=1/3、3: S=1/4)

調査南区遺構

SK111 (第35図)

D-2区で検出される方形の土坑と推定される。南及び東側は調査区外に延びる。長軸約1.2m + α 、短軸約0.74m + α 、検出面からの深度は約0.34mを測る。暗茶褐色を基調とした砂質土で埋積される。出土遺物から15世紀代に比定される。

SK111出土遺物 (第36図-1)

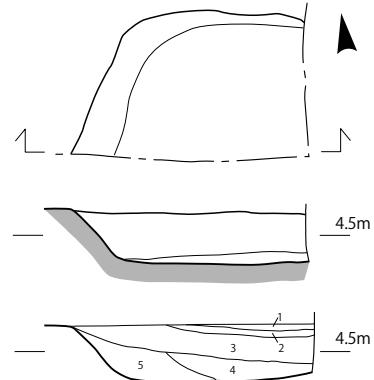
1は、土師器皿。底部は回転糸切り離しが観察される。底部から口縁部にかけて外傾しながら直線的に立ち上がる。15世紀代か。

SK115出土遺物 (第36図-2)

2は、龍泉窯系青磁碗。断面四角の高い高台で、畳付の釉は削り取る。外底は露胎。混入品と考えられる。

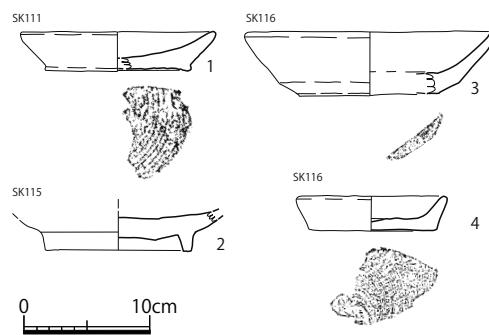
SK116出土遺物 (第36図-3・4)

3は、土師器壺。底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、体部下半外面に強いヨコナデが施される。15世紀後半に比定される。4は、土師器皿。底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。15世紀代に比定される。



1.暗茶褐色灰色土(粗砂・黄色ブロック含む)
2.暗茶褐色粘質土(黄褐色砂質土混入)
3.暗茶褐色粘質土(砂質土含む)
4.暗茶褐色砂質土(粗砂・灰褐色砂質ブロック含む)
5.茶褐色砂質土

第35図 SK111平面・断面・土層図 (S=1/40)



第36図 SK111・115・116出土遺物実測図 (S=1/3)

第1表 各遺構出土銭貨一覧表

遺構番号	銭貨名	初鑄造年	国/王朝名	法量				残存(%)	書体	備考
				径(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
S 005	政和通寶	1101年	北宋	2.4	0.5	0.1	3.22	100	篆書	やや歪んでいる
S 010	紹聖元寶	1094年	北宋	2.4	0.6	0.1	3.61	100	行書	星形孔あり
S 016	祥符元寶	1008年	北宋	2.4	0.6	0.1	3.86	100	行書	前面に土が付着、「祥」「府」確認
S 040	□□通寶	-	-	(2.4)	(0.6)	0.1	(1.28)	50	行書	1/2欠損、「通」「寶」確認
S 046	不明	-	-	2.4	0.6	0.1	3.65	100	-	銭全体に表裏に木片が付着しているため判読不能
S 046	元豐通寶	1078年	北宋	2.45	0.7	0.1	2.95	100	篆書	
S 046	□□□寶	(1038年)	(北宋)	2.4	0.65	0.1	2.57	100	真書	全体に摩耗している、「皇宋通寶(1038年、北宋)」か
S 046	□平□寶	-	-	0.9+ α	0.5+ α	0.1	(0.96)	50	真書	1/2欠損しており、「平」「寶」確認。「治平元寶」か
S 046	無文錢	中世	日本	2.2	0.5	0.08	2.24	100	-	鏹錢、錢体が歪んでいる
S 048	不明	-	-	2.5+ α	0.6+ α	0.15	(2.55)	50	-	多量の金属片が付着しているため判読不能
S 048	不明	-	-	1.0+ α	-	(0.1)		20	-	残部僅少のため判読不能
S 050	元豐通寶	1078年	北宋	2.5	0.6	0.1	3.54	100	篆書	
S 050	不明	-	-	(2.7)	-	(0.4)	(2.26)	70	-	金属片・木片が付着しているため判読不能
S 065	□□□寶	-	-	0.8+ α	0.5+ α	0.06	(0.3)	20	行書	「寶」部のみ残存。全体に摩耗している
S 075	不明	-	-	2.4+ α	0.5+ α	0.1	(1.47)	60	-	銭面が摩耗しているため判読不能
S 080	不明	-	-	(2.6)	-	(0.3)	(3.94)	100	-	青銅片が銭貨を包むように锈着しているため判読不能
S 108	元豐通寶	1078年	北宋	2.3	0.6	0.1	5.68	100	行書	銭貨2枚が癒着、錢体が歪んでいる
	不明	-	-	2.4	0.6	0.1		100	-	
S 118	不明	-	-	2.5	0.4+ α	0.1	(5.06)	100	-	青銅製品?及び金属片が秀锈着しているため判読不能
北区東壁	元豐通寶	1078年	北宋	2.5	0.6	0.1	3.11	95	行書	内側孔が広く、背面輪に若干ずれが見える

第3章　まとめ

検出された遺構の帰属時期について

今回の調査で検出された遺構は大きく15世紀後半、16世紀前半から後半、16世紀後半以降の3時期に分けられる。

16世紀後半以降に比定される遺構群にはSK024のような火災処理と考えられる土坑や、2次被熱により釉変した青花や壁土等が出土している遺構、近世（18世紀中頃）の遺物を内包する遺構が確認された。

SK024等の火災処理と推定される遺構の帰属時期については、①天正14年（1586）島津侵攻後の町屋復興に伴う時期②16世紀後半～末段階の遺物が混入した近世の時期が想定される。遺物の帰属時期から推定すると①と想定されるが、火災処理後の復興及び土地利用の連続性をもって考えれば、島津侵攻以降から府内城城下町に移動するまでの遺構が検出されていない状況から②の可能性が高いのではないかと推定される。

16世紀前半から後半に比定される遺構群は、ロクロ目の土師器を内包する。遺構は廃棄土坑が多く、SK085のような鍛冶関連遺物が廃棄された土坑が確認された。推定「第1南北街路」沿いにみられる基本地割（N-10°-E）に直交するSD095（区画溝）が確認され、町屋裏手の廃棄空間が想定される。このことから本調査地における町屋の展開は、この時期と考えられる。

15世紀後半に比定される遺構は僅かで、明確なのはSX110である。土坑は地下式倉庫跡（穴蔵）と推定できる。遺構からは土師器壊や瓦質の鍋が出土している。

溝状遺構（SD095）について

溝状遺構SD095（以下、SD095）は『戦国時代の府内復元想定図』（以下、復元想定図）にみられる推定「第1南北街路」にほぼ直交していると推測した。これを周辺調査の成果から再検討し、地割の復元をおこなってみたい。周辺の調査で確認された地割について

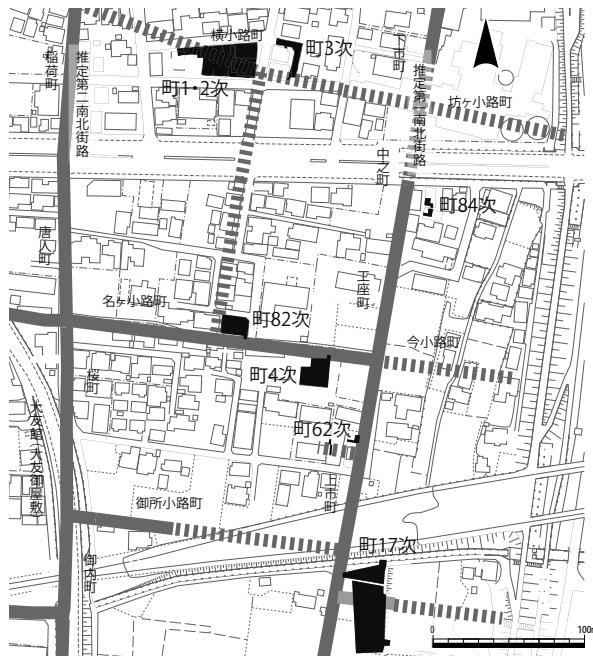
- ・中世大友府内町跡第1・2・3次調査（以下、町1・2・3次）：横小路町
- ・中世大友府内町跡第4次調査（以下、町4次調査）：上市町
- ・中世大友府内町跡第82次調査（以下、町82次調査）：名ヶ小路町
- ・中世大友府内町跡第17次調査（以下、町17次調査）：清忠寺町
- ・中世大友府内町跡第62次調査（以下、町62次調査）：上市町

町1・2次調査では、N-67°-Wに指向する道路状遺構が確認され、隣接する町3次調査においては道路状遺構の延長がN-80°-Wに屈折して確認された。これは大友館を中心に敷かれた基本地割から、15世紀後半以前に遡るといわれる基本地割に変わる変化点と推測される。つまり、これより東側はN-10°-Eを基軸として町割りが行われていると推測される。

町4次・町82次調査では、東西方向（N-82°-W）に指向する道路状遺構が確認された。ほぼ推定「第1南北街路」に直交する基本地割が確認された。

町17次・62次調査では、推定「第1南北街路」が「復元想定図」通りに確認され、両調査区の道路を結ぶ基本地割はN-10°-Eを示す。

このように『戦国時代の府内復元想定図』通りに道路状遺構が確認され、推定「第1南北街路」周辺



第37図 第1南北街路周辺調査区 (1/5,000)

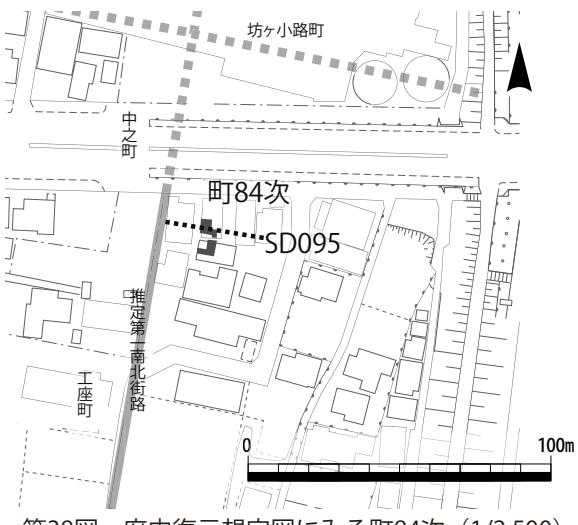
ではN-10°-Eを基本地割としている事が推測される。本調査地「中之町」においても同様の地割が推定される。このことからN-80°-Wを指向するSD095は推定「第1南北街路」に直交すると想定される。

明治時代の地籍図に見る地割について

『戦国時代の府内復元想定図』において、本調査地は「中之町」に比定されており推定「第1南北街路」に面すると想定されている（第38図）。一方、明治時代の地籍図に基づいて大分市歴史資料館が作成した『府内古図』の現地比定においては「坊ヶ小路町」に面した町屋が想定されている（第40図）。これに調査区を当てはめると、東西道路に面した南北に長い短冊形地割の裏手に位置することとなり、およそSD095周辺に小字界があたることが認められる（第39図）。この状況からSD095は背割溝としての機能を有するものであり、加えて調査南区で確認された互層堆積が町単位の異なる整地という所見のみならず、町境を表すなんらかの遺構である可能性も考えられる。

しかし一方で、近世「坊ヶ小路町」には大分川対岸（下郡）に渡る渡河点が存在しており、これに起因して新たな地割が成立した可能性が指摘できる事、また「坊ヶ小路町」以外に推定「第1南北街路」沿いに面する町屋で南北方向の短冊形地割が認められない事など、SD095を背割溝として判断するには問題点も指摘される。

今回の調査データでは結論を見出すには十分とは言いがたいものであった。今後周辺地域において地割に関する文献的、歴史地理学的な検証がおこなわれ、加えて明確な遺構の確認により精査検証される事が望まれる。



第38図 府内復元想定図にみる町84次（1/2,500）



第39図 明治時代の地籍図にみる町84次（1/2,500）



第40図 明治時代の地籍図に基づく地割図（1/2,500）

第2表 遺物観察表

版組番号	種別	器種	法量 (cm) + () は復元				胎土	色調・釉調		調整・文様		備考	
			口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	内面	外面	内面	外面	内面	外面		
								内面	外面	内面	外面		
第8図-1	土師器	皿	(8.4)	1.2	(6.8)	角閃石・長石 白色・赤色粒子	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/6 橙	ナデ	ナデ、回転糸切り	15世紀代		
第8図-2	土師器	坏	(12.4)	3.6	(8.8)	白色・赤色粒子	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ナデ	ナデ、回転糸切り	15世紀代		
第10図-1	五彩 (皿)	皿	-	1.6+α	(11)	陶土に近い	透明釉	透明釉	見込み: 2条界線 施釉後絵付け	施釉後絵付け	疊付部釉剥ぎ 2次被熱により釉変		
第10図-2	青花	碗	-	4.3+α	-	白色粒子 (少)	透明釉	透明釉	2条界線	2条界線、草花文様	景德鎮窯 小野分類染付皿E群		
第10図-3	京都系土師器	皿	(14.0)	2.2	-	白色粒子 (少) 赤色粒子 (少)	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部: ヨコナデ 体部: ナデ	口縁部: ヨコナデ 体部: ナデ	塩地編年第1期		
第10図-4	京都系土師器	皿	9.2	2.4	-	角閃石・長石 白色粒子 (少)	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	口縁部: ヨコナデ 体部: ナデ	口縁部: ヨコナデ 体部: 指オサエ後ナデ	塩地編年第2期 灯明皿として使用		
第10図-5	備前焼	壺	-	6.1+α	-	白色粒子 (少)	10YR7/3 にぶい黄橙	5YR3/3 暗赤褐	ヨコナデ	ヨコナデ	乗岡編年近世I期b		
第11図-1	白磁	皿	-	2.1+α	-	黒色粒子 (少)	施釉	施釉	-	-	型作り 貢入あり		
第11図-2	京都系土師器	皿	(15.5)	2.4	-	白色粒子 (少)	5YR6/6 橙	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁部: ヨコナデ 指オサエ後ナデアゲ	口縁部: ヨコナデ 体部: 指オサエ後ナデ	塩地編年第1期		
第11図-3	土師器	坏	(16.0)	3.8	(9.2)	赤色・白色粒子	10YR7/2 にぶい黄橙	5YR6/6 橙	ナデ	ナデ、回転糸切り	ロクロ目土師器		
第11図-4	土師質土器	燭台	-	6.0+α	8.2	長石 (少) 白色粒子 (少)	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	-	ヨコナデ、回転糸切り	-		
第11図-5	常滑焼	壺	(54.4)	8.1+α	-	白色粒子 (少)	Hue 5YR5/6 明赤褐	5YR3/4 暗赤褐	ヨコナデ	ヨコナデ	-		
第12図-1	青花	皿	-	1.7+α	(8.0)	白色粒子 (少)	透明釉	透明釉	見込み: 2条界線 雲龍文	外面高台境: 2条界線 高台内: 「長口口貢」	景德鎮窯 小野分類染付皿E群		
第12図-2	京都系土師器	皿	12.2	2.4	0.6	白色粒子 (少)	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	口縁部: ヨコナデ 体部: ナデ	口縁部: ヨコナデ 体部: ナデ	塩地編年第2期		
第12図-3	青花	碗	(13.9)	5.7	5.0	白色粒子 (少)	透明釉	透明釉	見込み: 1条界線内「福」 口縁部: 1条界線	高台境: 1条界線 口縁部: 文様	漳州窯系 16世紀後半 高台内露胎、二次被熱により釉変		
第12図-4	京都系土師器	皿	(15.2)	2.9	(6.9)	角閃石・長石 白色粒子	10YR7/6 明黄褐	10YR4/2 灰黄褐	口縁部: ヨコナデ 指オサエ後ナデアゲ	口縁部: ヨコナデ 体部: 指オサエ後ナデ	塩地編年第2期 16世紀前半		
第12図-5	土師器	坏	(18.4)	1.7	(10.2)	金雲母・長石 赤色・白色粒子	7.5YR5/2 灰褐	5YR6/6 橙	ヨコナデ	ヨコナデ 回転糸切り	16世紀前半代か 大型のロクロ目土師器		
第12図-6	京都系土師器	皿	-	2.5+α	-	白色粒子 (少)	5YR3/3 暗棕褐	7.5YR6/3 にぶい褐	口縁部: ヨコナデ 体部: ナデ	口縁部: ヨコナデ 体部: 指オサエ後ナデ	塩地編年第2期 内面にスス付着		
第12図-7	土師器	皿	(7.75)	2.0	4.2	角閃石・長石 白色・橙色粒子	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	ナデ	ナデ、回転糸切り後ナデ	15世紀後半～16世紀前半 口縁部にスス付着		
第13図-1	青花	碗	-	1.6+α	(4.0)	白色粒子 (少)	透明釉	透明釉	内面見込み: 山水人物	高台内2条界線内「長命富貴」	景德鎮窯		
第13図-2	青花	碗	-	2.7+α	-	白色粒子 (少)	透明釉	透明釉	口縁部: 2条界線	口縁部: 2条界線 草花文様	景德鎮窯 小野分類染付碗E群 二次被熱により釉変		
第13図-3	青花	碗	(12.0)	4.5+α	-	黒色粒子 (少)	黄灰色がかった 透明釉	黄灰色がかった 透明釉	口縁部: 界線	口縁部: 界線	漳州窯系		
第16図-1	土師器	坏	-	3.5	-	赤色・白色粒子	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄褐	ナデ	ナデ、回転糸切り	15世紀代か		
第16図-2	土師器	坏	-	3.9	-	赤色・白色粒子	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	ナデ	ナデ、回転糸切り	15世紀代か		
第18図-1	土師質土器	燭台	4.8+α	4.7+α	5.85	角閃石・長石 白色・橙色粒子	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	-	ヨコナデ、回転糸切り	-		
第18図-2	土師器	坏	(12.15)	2.8	(6.9)	長石・白色 橙色粒子・砂粒	2.5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙	ヨコナデ	ヨコナデ、回転糸切り	ロクロ目土師器		
第18図-3	土師器	坏	-	3.6+α	-	角閃石・長石 白色・白色粒子	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ナデ	ナデ	15世紀後半		
第18図-4	土師器	皿	(10.25)	2.4	(7.2)	角閃石・長石	5YR5/3 にぶい赤褐	5YR3/1 黒褐	ナデ	ナデ、回転糸切り	2次被熱 口縁部に帯状の付着物あり		
第20図-1	土師器	坏	(11.4)	2.8	(6.2)	白色粒子	5YR5/6 明赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	ヨコナデ	ヨコナデ 回転糸切り	ロクロ目土師器		
第20図-2	土師器	坏	(12.4)	2.9+α	-	長石・雲母 長石・白色粒子	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	ヨコナデ	ヨコナデ	-		
第20図-3	瓦質土器	碗	(10.2)	3.9+α	-	白色粒子	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	ナデ、オサエ後ナデ	ケズリ後ナデ・ミガキ	16世紀代		
第22図-1	土製品	埴燒	5.3	2.8	-	長石・白色粒子	10YR3/1 黒褐	7.5Y2/1 黒	指オサエ	指オサエ	内面に付着物あり		
第22図-2	土師質土器	鍋	(34.0)	10.1+α	-	角閃石・長石 白色粒子	7.5YR4/1 褐色	7.5YR6/3 にぶい褐	口縁部: ヨコナデ 体部: 指オサエ後ナデ 体部: ハケ	口縁部: ヨコナデ 体部: 指オサエ後ナデ 体部: ハケ	体部下半にスス付着 先端部密解		
第22図-3	土製品	ふいご	10.8+α	4.9	4.7	長石・白色粒子	5YR6/6 橙	-	-	ナデ	-		
第22図-4	銅塊	不明	3.1+α	4.6+α	1.4	-	-	-	-	-	-		
第22図-5	石製品	茶臼	9.5+α	7.0+α	4.8	安山岩	10YR5/1 褐色	-	-	-	-	茶臼の下臼	
第22図-6	石製品	臼	14.0+α	9.3+α	9.8+α	安山岩	10YR5/1 褐色	-	-	-	-	粉挽き臼の下臼	

版組番号	種別	器種	法量(cm)・()は後元 口径/器高/底径/ 最大長/最大幅/最大厚	胎土	色調・釉調		調整・文様		備考
					内面	外面	内面	外面	
					—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	
第23図-1	瓦質土器	羽釜	6.5+α 6.6+α 0.7	白色粒子	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	外面にスス付着
第23図-2	中国産陶器	壺	— 3.6+α —	黒色・白色粒子	7.5YR にぶい橙	露胎部：5YR2/3 極暗赤褐	口縁部：黒色釉	黒色釉・釉ダレ	粘土堆积上げ 中国産
第25図-1	土師器	皿	(8.5) 1.7 (4.6)	角閃石(多) 赤色・白色粒子	5Y6/6 橙	—	ヨコナデ	ナデ、回転糸切り	ロクロ目土師器
第25図-2	土師器	壺	— 2.4+α —	角閃石・長石 赤色・白色粒子	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ヨコナデ	ヨコナデ	ロクロ目土師器 口縁部黒斑あり
第25図-3	土師器	壺	— 2.1+α —	赤色・白色粒子	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ヨコナデ	ヨコナデ	ロクロ目土師器
第25図-4	土師器	壺	— 2.7+α —	金雲母 白色粒子	7.5YR6/4	7.5YR6/4 にぶい橙	ヨコナデ	ヨコナデ	ロクロ目土師器
第25図-5	土師器	壺	— 2.0+α 6.6	角閃石・長石 赤色・白色粒子	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ヨコナデ	ヨコナデ、回転糸切り	ロクロ目土師器
第25図-6	土師器	皿	7.9 2.2 (4.3)	角閃石・長石 赤色・白色粒子	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ヨコナデ	ヨコナデ、回転糸切り	ロクロ目土師器
第25図-7	土師器	皿	— 1.7+α (4.1)	角閃石・長石 赤色・白色粒子	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ヨコナデ	ヨコナデ	ロクロ目土師器
第25図-8	土師器	皿	— 1.2+α 4.4	角閃石 赤色・白色粒子	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/6 橙	ヨコナデ	ナデ、回転糸切り	ロクロ目土師器
第25図-9	土師器	皿	— 1.6+α —	角閃石・長石 赤色・白色粒子	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/6 橙	ヨコナデ	ナデ	ロクロ目土師器
第25図-10	銅製品	錢貨	2.7 — 0.8	—	—	—	—	—	表面熔解
第25図-11	石製品	臼	9.5+α 10.0+α 8.35+α	—	—	N6/0 灰	—	磨り目、膚穴	安山岩 粉挽き臼の臼
第27図-1	土師器	壺	— 2.3+α (6.4)	長石・橙色粒子	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	ヨコナデ	ヨコナデ、回転糸切り	ロクロ目土師器
第27図-2	銅製品	錢貨	2.6 — 1.1	—	—	—	—	—	表面熔解 熔解中に付着した木質あり
第28図-1	備前焼	小壺	— 3.5+α (4.9)	白色・橙色粒子	10YR4/3 赤褐	10YR4/3 赤褐	ヨコナデ	ヨコナデ	—
第28図-2	土師器	皿	(10.0) 2.0 (5.85)	白色粒子	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	ヨコナデ	ヨコナデ、回転糸切り	ロクロ目土師器
第28図-3	土師器	皿	4.6 1.2 3.1	金雲母・角閃石 長石・白色粒子	5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	ヨコナデ	ヨコナデ、回転糸切り	ロクロ目土師器
第28図-4	銅製品	錢貨	2.8 2.1+α 0.7	—	—	—	—	—	表面が被熱により熔解している
第31図-1	土師器	壺	— 2.1+α (8.8)	長石・白色粒子	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	ナデ	ナデ、回転糸切り	15世紀代か
第31図-2	青磁	皿	— 1.4+α —	白色・黒色粒子	10YR7/4 にぶい黄褐	施釉緑灰色	口縁へラガキ後施釉	—	龍泉窯系青磁綾花皿 両面に貫入あり
第31図-3	土師器	壺	— 2.3+α —	—	長石	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい黄褐	ナデ	ナデ
第31図-4	土師質土器	燭台	— 4.2+α 5.2	角閃石・長石 白色粒子	—	—	2.5YR6/6 橙	ヨコナデ、指オサエ後ナデ、回転糸切り、穿孔あり	—
第31図-5	備前	壺	(19.2) 7.2+α —	白色粒子	5YR3/1 黒褐	5YR2/1 黒褐	ヨコナデ	ヨコナデ	—
第31図-6	土師器	壺	(12.4) 3.6 (8.8)	赤色・白色粒子	7.5YR6/4 にぶい黄褐	10YR7/3 にぶい黄褐	ナデ	ナデ、回転糸切り	15世紀代 内外面に若干スス付着
第33図-1	土師器	壺	(12.8) 3.8 (8.8)	長石・橙色粒子	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	ナデ	ナデ、回転糸切り	15世紀後半
第33図-2	土師器	壺	(12.6) 3.9 8.5	角閃石・長石 白色粒子	10YR7/4 にぶい黄褐	10YR7/4 にぶい黄褐	ナデ	ナデ、回転糸切り	15世紀後半
第33図-3	土師器	壺	(12.4) 3.2 (9.4)	長石・黒色粒子	5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	ナデ	ナデ、回転糸切り	15世紀後半
第33図-4	土師器	壺	(12.0) 3.8 (9.2)	長石・黒色粒子	5YR6/6 橙	5YR6/2 灰黄褐	ナデ	ナデ、回転糸切り	15世紀後半
第33図-5	土師質土器	鉢	— 4.7+α —	石英・長石 白色・黒色粒子	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y4/1 黄灰	ハケ	口縁部：ヨコナデ 体部：指オサエ後ナデ	—
第34図-1	土師器	壺	(12.4) 3.0 (8.0)	石英・長石 白色粒子	10YR6/3 にぶい黄褐	5YR6/6 橙	ナデ	ナデ、回転糸切り	—
第34図-2	瓦質土器	不明	— 3.5+α —	白色粒子(少)	Hue N3/0 暗灰	Hue N3/0 暗灰	指オサエ後ミガキ	指オサエ後ナデ	外面にスス付着
第34図-3	瓦質土器	鍋	— 5.7+α —	石英・長石 白色・橙色粒子	10YR4/1 褐灰	7.5YR6/4 にぶい橙	ヨコナデ、不定方向のハケ	指オサエ後ナデ	—
第36図-1	土師器	皿	(7.8) 1.6 (5.8)	角閃石・長石 赤色・白色粒子	7.5YR6/6 橙	7.5YR にぶい橙	ナデ	ナデ、回転糸切り	15世紀代
第36図-2	青磁	碗	— 1.5+α (5.8)	黑色粒子	施釉：7.5YR2/1 黒色	施釉：10Y7/4 灰白	見込み：釉剥ぎ	高台内：露胎	龍泉窯系 貫入あり
第36図-3	土師器	皿	(10.0) 2.4 (5.4)	赤色・白色粒子	5YR6/8 橙	7.5YR6/6 橙	ナデ	ナデ、回転糸切り	15世紀後半か
第36図-4	土師器	皿	(6.0) 1.3 (5.2)	赤色・白色粒子	7.5YR6/6 橙	—	ナデ	ナデ、回転糸切り	15世紀代

遺構写真



調査北区完掘状況（西から）



調査南区完掘状況（東から）



調査北区南東壁土層（第5図：東壁土層-2）



調査南区南壁土層（第5図：南壁土層）



SK085 遺物出土状況（南から 第21図）



SK085 フイゴ出土状況（第22図）



SK085 坪堀出土状況（第22図）



SK085 銅塊出土状況（第22図）

遺構写真



SX110 完掘状況（北から 第30図）



SK045 完掘状況（西から 第24図）

遺物写真



SP007 出土漳州窯系青花碗（第12図-3）



SK070 出土景德鎮窯青花皿（第12図-1）



SK070 出土景德鎮窯青花皿（第12図-1）



SK054 出土中国産陶器壺（第23図-3）



SK085 出土坦堀（第22図-1）



SK085 出土坦堀（第22図-1）



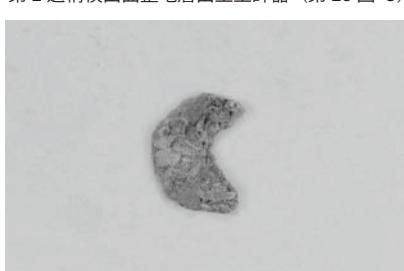
第2 遺構検出面整地層出土土師器（第28図-3）



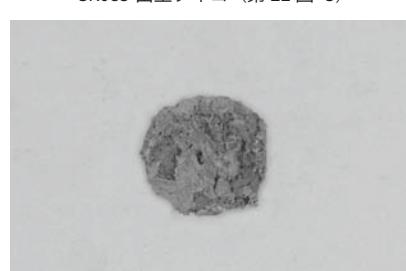
SK085 出土フィゴ（第22図-3）



SK085 出土銅塊（第22図-4）



第2 遺構検出面整地層出土土錢貨（第28図-4）



SK118 出土銭貨（第27図-2）



SK045 出土銭貨（第25図-9）

報告書抄録

ふ り が な	おおともふない16
書 名	大友府内16
副 書 名	中世大友府内町跡第84次調査報告 住宅併用病院建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シ リ ー ズ 名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第103集
著 者	廣瀬育子・三嶋桂司
編 集 者	三嶋桂司
編 集 機 関	大分市教育委員会
所 在 地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 TEL 097 (534) 6111
発 行 年 月 日	西暦2010年3月31日

ふ り が な 所 所 取 り 遺 在 跡 名 所	ふ り が な 所 所 在 地 所	ヨード		北緯 (° ' ")	東經 (° ' ")	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
ちゅうせいおおともふないまちあと 中世大友府内町跡	おおいたにしきまちさんちょうめ 大分市錦町3丁目	44201	201051	33 13 41	131 37 25	2008.10.30 ～ 2008.11.21	36.25	住宅併用病院建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項
中世大友府内町跡 第84次調査	包蔵地ほか	中世	溝状遺構・柱穴列・廃棄土坑			陶器・磁器・土師器・錢貨		16世紀前半代の鍛冶関連 遺物廃棄土坑

概要

本書は平成20年度に行った中世大友府内町跡第84次調査の報告書である。推定復元想定図の「中之町」の一角にあたり、推定「第1南北街路」に面した町屋の裏手にあたる廃棄空間と推定される。東西方向に延びる溝状遺構は推定「第1南北街路」に直行すると推定され、敷地を区画する役割が考えられる。これを境とし、南北に異なる整備が認められる。

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第103集

大友府内 16

中世大友府内町跡第84次調査報告

住宅併用病院建設に伴う発掘調査報告書

2010

平成22年3月31日

発行 大分市教育委員会

大分市荷揚町 2 番 31 号